修道

No. 70

題字は吉田學(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園（中・高）同窓会

〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241－8291　FAX(082)249－0870
TEL(082)２４１－６６８６(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp

2009年度　修道学園（中・高）同窓大会

目　次

同窓会ニュース

平成21年度修道学園(中・高)同窓大会報告 ……1458
同窓会名簿の刊行について ……1459

支部だより

平成21年度修道学園同窓会近畿支部総会報告…齋本　隆司 …1460

同期会報告

東京の修道同期会(旧中39回卒と高校1回卒)は今年30回目を迎えます
三宅　利正 …1463
４回生の「石田先生を偲ぶ会」……1466
母校訪問（高校8回中学一組）…山本　富男 …1467
「烈士暮年　壮心不已」入学50周年記念同期会と峰崎直樹君
財務副大臣就任祝い ……土井　和士 …1469
『修道31会』30年目の修学旅行…豊田　章宏 …1470

特別寄稿

平山郁夫画伯と修道……仲井　正美 …1473
「乙亥一月　十竹軒日録」
(海軍兵学寮時代・明治8年)を読む …畠　眞實 …1477
修寿会関催報告……木村　正勝 …1497
香川龍介君の個展に出席して(体当たりしている)…林　孝治 …1498
ねんりんピックに出場して(生涯サッカーの現役として)
林　孝治 …1501

人物往来

味方の損害、戦艦１……故景山崇人 …1503
被爆体験が信仰の原点……四竈　揚 …1503
中国文化賞受賞……上田　宗冏 …1504
広島修道大学長に8年ぶり就任…市川　太一 …1505
五木さん作品「親鸞」を語る …渡辺　郁夫 …1505
抗菌剤で感染予防……二川　浩樹 …1505
港まちづくりの現場を歩く－広島港－ …新田　時也 …1506
市民に青年の“夢”を語る広島まちづくり「未来地図」作成
緒方　直之 …1507

学園だより

第62回修道高等学校卒業式 ……1508
修道中学校・修道高等学校総合体育館完成 ……1510
ＡＰＥＣジュニア会議国内代表に選出 …1511

連合会ニュース

つなげたい。人と未来と広島を。
学園創始285年・広島修道大学50周年記念事業、本年(2010年)開催へ ……1512

事務局だより

故平山郁夫画伯「お別れの会」……1513
平成22年度同窓大会開催一覧 ……1514
学園紛争心残りは卒業式 ……1514

訃　報 ……1515

同窓会ニュース

平成21年度修道学園(中・高)同窓大会報告

高校第53回世話人代表　大　辻　健　介

平成21年度修道学園（中・高）同窓大会は、私たち高校第53回生が世話人となり、担当させて頂きました。

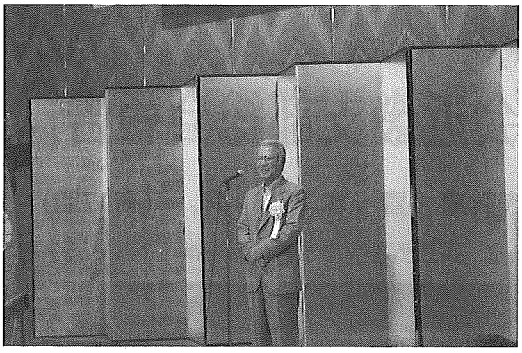
私は高校を卒業して１年の浪人生活を経験した後、東京の大学に進みました。そのまま東京で就職して暮らしていくのだろうと思っていましたが、いつのまにか気持ちは広島に戻る方向に固まっており、無事広島の企業に就職することとなり、社会人として慌ただしい生活を送っていました。そんな2008年の夏、社会人３年目の私は、高校52回世話人代表の田村さんより電話をもらい、「９月に修道全体の同窓大会があるけえ予定空けといて。今年は俺らの代が幹事で、来年はお前らの代が幹事じゃけえ。ちなみに大辻に代表してもらうけえ。」と言われました。この話を聞くまで、同窓大会が毎年開催されていることも、卒業して９年目の代が幹事をすることも知らず、状況がよく理解できていないまま、平成20年度の同窓大会に出席しました。場の雰囲気や規模の大きさに圧倒され、とんでもないことを引き受けてしまったと相当責任を感じましたが、やるからにはみんなの記憶に残るような同窓大会をつくりあげたいと強く想うようになりました。

広島にいる同級生10人ぐらいが中心となって、同窓大会のテーマを「祭り」、キャッチフレーズを「アイ・ラブ・修道」として１年間同窓大会の準備を進めていきました。休日はほとんど学校のプレハブに集まり、色々な意見を出し合いながら、時には言い合いになることもありましたが、そこには同窓大会を成功させたいという熱い想いがあったのだと思います。３回、13回、23回、33回、43回の先輩方、担当副会長の廣谷さんには、お忙しい中何度も学校での会議にご参加して頂き、大会運営のアドバイスを頂いたり、本来なら私たちが全てしなければならないはずの協賛広告の依頼、チケット販促等もご協力頂き大変助かりました。本当にありがとうございました。

紆余曲折を経て準備を進めましたが、最後の１ヶ月は大会当日に何人の方々に来て頂けるのだろうと思いながら、不安と苛立ちの毎日を過ごしていました。しかし、大会が始まってみると、たくさんの先輩方のご協力や全国各地から集まってくれた同級生のみんなの協力により無事盛大な会となり、最後に挨拶をした時には、感謝の気持ちと安堵の思いが込み上げてきて言葉になりませんでした。

最後になりましたが、同窓大会の開催にあたり、広告協賛・チケット販売に多大なるご協力を頂いた先輩方、何ヶ月にも渡り叱咤激励を交えつつご指導、ご鞭撻して下さった、「『３』のつく回の卒業生」の先輩方や担当副会長の廣谷さん、本当にありがとうございました。数え上げれば切りが無いのですが、この会の為にご尽力頂いた全ての方々に感謝しております。多くの方々のご協力があったおかげで、53回生も世話人として役割を果たせたのではないかと思います。53回生を代表して改めて厚く御礼を申し上げます。本当に有難うございました。

そして同窓大会のために、一緒に１年間頑張ってくれた同級生のみんな本当にありがとう。また、みんなで集まろう。



大田会長挨拶

来賓の浅野長孝様のご挨拶

担当副会長・世話人代表引継ぎ式

恒例の校歌斉唱

修道学園（中・高）同窓会会員名簿の刊行について

名簿委員会委員長　中　村　靖富満　（高30回）

修道学園（中・高）同窓会会員名簿は、平成17年３月に第34号を改訂版を刊行して以降は、個人情報保護法の施行を受けて、個人情報の慎重な取り扱いを期す必要もあり、新たな名簿発刊をしばらく見合わせておりました。しかしながら、多くの同窓生から同窓会活動のさらなる充実、発展のためには、同窓会最新の情報を掲載した名簿が不可欠であるとの強い要望が寄せられ、このたび、同窓会会則の事業目的の一つにも掲げられている名簿の刊行事業を実施いたしました。

第35号の刊行にあたりましては、個人情報保護法の趣旨に則り、同窓生お一人お一人の同意を得て掲載することを大原則とし、刊行作業につきましてもプライバシーマーク取得のデータ整備専門会社である(株)サラトに依頼いたしました。

同窓生及び役員の皆様はもとより多くの関係者の皆様方のご理解ご尽力により、個人データが80％の判明率に達し、より充実した、より正確な名簿を刊行することが出来ました。また、刊行のための資金として活用させていただくべく、広告のお願いをいたしましたところ、厳しい経済情勢にもかかわらず多くの同窓生及び企業様から、多大なるご協力をいただきました。同時に、名簿の販売冊数も目標数を大幅に超え、改めて本校同窓会の絆の強さを感じた次第でございます。

今回の名簿刊行が、来年100周年を迎えます、我が修道学園（中・高）同窓会のさらなる発展並びに会員相互のネットワークの構築の一助となることを願っております。

最後に、刊行にあたり多大なるご理解とご協力をいただきました皆様に心から感謝を申し上げご報告といたします。

支部だより

平成21年修道学園同窓会近畿支部総会報告

代表幹事　齋　本　隆　司　（高17回）

当近畿支部総会を間近に控えた12月２日、母校修道の誉れある大先輩であり、戦後日本画壇を文字どおり牽引されてこられた平山郁夫画伯が惜しくも逝去されました（合掌）

平成21年度近畿支部総会は、平成21年12月５日(土)午前11時より、会場も新たに、ハービス大阪６階のガーデンシティクラブ大阪オリオンの間で開催されました。

朝がたの時雨模様も、会が始まるころには薄日がさし始め、月遅れながら冬隣の季語が似つかわしい陽気となりました。

今年は、当日欠席の目立った昨年総会の反省から、各学年幹事を通じての総会直前の再度の確認が功を奏してか、いわゆるドタキャンは皆無で、約80名の出席者を得て近年にない賑やかな総会と

なりました。

会場内に校歌安芸の小富士が流れるなか、久方ぶりの再会を確かめ合う声が弾み、総会のムードは徐々に盛り上がりを見せ始めました。

司会は今年で3年連続となる35回畠さん、初会場とあってか、やや遅参者が目立ったため、定刻少し過ぎに開会を宣しました。

まず会長の16回西原さんから、開会の挨拶を述べました。

出席者及び各来賓へのお礼の後、来春発刊予定の同窓会名簿の情報をベースに、若い層への働きかけを強化し、来年度の総会には、是非とも出席者100名以上を達成したいとの抱負を述べました。次いで、代表幹事の17回齋本から、総会会場変更の経緯等本年度の支部活動状況について報告しました。

引き続き副代表幹事で会計担当の22回湯谷さんから会計報告を、またこれを受けて17回の監査結城さんから監査報告をそれぞれ行いました。

引き続き来賓のご挨拶に移りました。

トップバッターは、田原校長。平山画伯逝去直後に押しかけた報道陣の取材対応に追われ、これで万一将来自分のことで記者会見を迫られたときの、格好の予行演習になったとユーモアたっぷりのつかみで早くもどっと沸かせました。

また、明年4月に、母校修道が広島藩の藩校として創始した沿革を重んじ、浅野家宗家16代長孝様が修道学園の名誉理事長に就かれることが決定したとの報告がありました。

ついで本題の母校の近況報告です。

まず進学面では、この春の卒業生が一連の改革の3年目の完成学年であり、数10年ぶりに東大をはじめいわゆる難関10大学に100名以上の合格者を出すという目覚しい進学成績を挙げることができ、母校はいまやあふれんばかりの活気に満ちているとのうれしい報告がありました。

また、学業のみならず、運動部では世界ジュニアでの活躍が光る陸上短距離を筆頭に、テニス部、ハンドボール部、さらには文化部でもスクールバンド、囲碁など例年全国レベルの素晴らしい成績を収めており、これほど幅広い分野で活躍している学校は修道をおいてなく、このことは、修道がいかに多彩な才能をもつ人材の宝庫であるかということの証明である。

そして平山画伯や、本日の講演者である29回の近藤さんこそが、その代表的な事例に他ならないのではというお話は、知徳併進をモットーとするオールド修道ボーイ達の胸にどんなにか快く響いたことでしょう。

そして深刻な少子化の影響により私学の危機が叫ばれるなか、唯一修道においては年々受験生が増え続けているという報告にも大いに勇気づけられたものです。

次いで同窓会本部を代表され12回の土井洋二副会長より大田会長よりの祝辞を代読いただきました。

この中で、会長より、同窓会名簿作成に当たり情報提供への協力要請がございました。

来賓の最後は今年関東支部の代表幹事のバトンを受けられた20回の江崎正行さん。実は直前まで同期参加者はゼロで、せっかく東京から江崎さんが見えるのにこれはまずいということで、同期の新原さん（独立行政法人造幣局理事長）が帰京の予定を急遽変更し駆けつけたとの心温まるエピソードが披露されました。

江崎さんは、同窓会への想いとして、在校時の思い出にひたることもさることながら、社会人として対等に付き合うなかで、お互いの活躍ぶりを発見し触発し合うことこそ、本来の意義ではないかと常々感じているとの持論を述べられ、皆さん頷くことしきりでした。

そして、いよいよ総会の呼び物であります講演の部へと移りました。

今年の講師は29回の近藤達夫さん。7年間のドイツでの勤務を終えられこの10月に独電子機器（産業用ラジコンシステム）メーカーの日本法人を立ち上げられたばかりの多忙のなかを、この総会のために快く講師を引き受けていただきました。

講演のタイトルは「安芸の小富士に茜さし／歌は国境を越えて」何とも母校への郷愁をそそるタ

イトルではありませんか。

中学入学時の校歌斉唱・・・・この時の男性合唱団（音楽班）のハーモニーに魅せられ深い感動を覚えて以来37年余に及ぶ音楽活動・・・そのユーモア溢れる体験談の数々は平素音楽に馴染みの薄い面々にも新鮮な驚きと感動を呼び起こしたようです。

特に、近藤さんの合唱でのパートが、修道時代のテノールからバリトン、ベースへと変遷を遂げドイツでは再び高いほうのパートに移られたといったエピソード。また本来ひとつの音程のはずの歌声が実は発声した音程の周波数の3倍や5倍の整数倍の周波数のかすかな強さで聴こえるということ（これを専門用語で倍音と呼ぶそうで通常はひとりで発声した場合は聴こえないそうです）。

これが合唱の場合、ひとつの音程を全員で自然に柔らかく発声すると、倍音が勝手にハーモニーをつくることがあるそうで・・・さしずめハーモニーつきカラオケのような不思議な現象が自然に起きる・・・といったような門外漢にとってもとても興味深い話の数々（近藤さんの語り口そのものも快い響きでとても魅力的です）。

音楽は国境を越えて・・・スペインを代表する世界的な作曲家兼指揮者との邂逅とその後の交流、天皇皇后両陛下御前演奏などの数々の輝かしい経歴の披露・・・・

最後に、近藤さんは、「皆さんの夢は何ですか？私の夢は、仕事と歌を通じて日本と海外の架け橋となることです。修道の卒業生であることを誇りに誠心誠意練習を継続してまいります」とこれからのご自身の夢を語り、講演を締められました。

講演の余韻さめやらぬなか、天津前会長の音頭による乾杯に引き続き食事・歓談へと移りました。今回からの会場であるガーデンシティクラブ大阪は、在スイス日本領事館の総料理長として腕をふるった著名なシェフによる多彩なメニューに定評があり、皆さん次々と供される料理を堪能しながら、グラス片手に各テーブルを巡る姿が目立ちはじめました。

総会の諸準備や当日のカメラマン兼記録係りを一手に引き受けてもらっている13回伊藤さん、学年ごとに、校長や来賓を囲んでの記念撮影に駆り出され、大わらわの様子（これも総会名物のひとつです）。

会もたけなわにさしかかった頃、ゲストスピーカーの近藤さんから「お酒が入ったら少し歌いたくなってきました」とは待ってましたのうれしい申し出。出し物は、黒田節の歌詞を、イタリアナポリ民謡サンタ・ルチアのメロディーに載せた替え歌。やんやの喝采・アンコールに応えてオー・ソレ・ミオの熱唱と続き会の盛り上がりはピークに達しました。（皆さんとても得をした気分で満足そう）

しばらく歓談の後、デザート・コーヒーと進み、これまた呼び物の全員が輪になっての校歌斉唱、近藤さんの名リードで用意していた伴奏用CDは出番を失うはめになりました。

締めは16回吉井副会長による閉会の挨拶。各来賓・講演者へのお礼を述べ、今後の支部活動の鍵を握る若手にスポットを当てたいということで、本日出席の若手（？）３人に登壇を促し、めいめいに本日の感想、修道に対する想いを語ってもらうことになりました。

指名を受けた３名はいずれも法曹界とあって、弁舌さわやか・・・最後（最若手）の53回古谷さんのスピーチが終わったころには予定時間をかなりオーバーしていました。

最後に吉井さんから、従来当近畿支部の総会は、毎年12月の第１土曜日に開催してきたが、自営の方のご意見等をお聞きした結果、日曜日のほうが出席しやすいとの声が多く、来年から12月の第１日曜日（来年は、たまたま今年と同じ12月5日）に変更することにしたので、皆さん早速手帳にマークしていただき、来年の総会は100名以上の参加者で、又お会いしましょう・・・との締めの言葉でお開きとなりました。

このように、今年の総会は、次回のより一層の盛り上がりを予感させる充実した総会であったと世話役一同安堵の胸をなでおろした次第です。

これも、本総会のために遠方のところ早朝から駆けつけていただいた来賓の皆様方、講演者更には同窓会本部事務局ご担当者のお力添えのお陰と本紙面をお借りし心からお礼を申しあげます。

同期会報告

東京の修道同期会(旧中39回卒と高校1回卒)は今年30回目を迎えます

三　宅　利　正（旧中39回）

これは今から20年前の平成2年(1990)10月11日、私たちが還暦を迎えた年に亀清楼で開いた同期会の写真です。この時は韓国から金容元君が来日し、戦後45年ぶりに私たちとの再会を果たしました。この年に平山画伯が東京芸大の学長に就任しましたので、そのお祝いと金君の歓迎を兼ねて26名が参加しました。

滝沢　柳田　末政　平田
山村　藤原　山口　久保　光田　金石　金　菅広　檜山　大盛　井上　平山　須知　中西　藤田
三宅　大木　秋田　林　内山　迫　赤木　（下線は物故者）

あれから今年で20年になりますが、その時集まった旧友のうち約半数の方を失ってしまいました。

過去最多の29名の方に集まっていただいたのが、平山画伯が文化勲章を受章した平成10年(1998)の会でした。

山田　麓　内山夫人　大盛　須知　堀田　三瀬　柳田　滝沢　菅広　藤原　中西　大村　新岡　奥田
三宅　築島　平田　迫　末政　坪田　福井　光田
竹内　久保　平山　檜山　山村　林

その後も20名以上の方々に毎年参加していただいています。これも[亀清楼] という柳橋の老舗料亭に格別の配慮で毎年会場を提供してもらっていることや、林会長に東京ドームホテルでの宿泊に便宜を図ってもらっているので、大阪、奈良、淡路島、因島、それに地元広島などから、はるばる馳せ参じてくれる旧友が年と共に増えてきているお蔭なので感謝にたえません。

在京の修道同期生は若い頃から毎年のように集まっていたのですが、それが数年途切れた時期がありました。東京ディズニーランドで有名になった浦安市に私が引っ越して数年後の昭和56年、当時の浦安市長が浦安文化会館の大ホールの緞帳を平山画伯に依頼し、その完成時にご夫妻で浦安に来訪され、しばらくぶりに再会したのですが、『修道の同期会をまた復活しようよ』との平山さんの提唱で、私が在京の仲間に呼びかけたところ、その年の12月５日には23名の人が集まってくれました。

それからは12月中の土曜日で、平山さんがなるべく出席可能な日を選んで毎年開いてきたのですが、同期会再開のきっかけとなり、『たとえ杖をついて歩くようになっても、集まれる間はずっと集まろうよ！』と皆に呼び掛けた平山さんに先立たれてしまい、せめてもう一年…… という無念さには一入のものがあります。

昭和56年(1981)から毎年途切れることなく続いてきた東京の修道同期会は、今年で30回目となりますが、今までご出席いただいた旧友のうち

松浦毅男、井上真一、秋田孝雄、内山　康、赤木　碧、安田　実、山村英信、三瀬有策、檜山一喜、滝沢　進、大木正明、藤原三城彦、大村　連、金石雄之、小尻正敏、米山　豊、多田二郎　そして平山郁夫　と18名の方々が鬼籍に入ってしまいました。

平山さん最後の出席となった平成20年(2008)12月27日の同期会

[目的、に向かっていると、時間との競争もあるので、時には夢の中でも画を描いていますよ。

手が足りなくて、足まで使って描いてるんです。皆さんも何でもいいから目標を持つと元気が出るんじゃないでしょうかね]　－これが私たちへの最後の言葉となりました－

菅広　岡島　奥本　築島　光田　末政　麓　山田
内山夫人　竹内　平田　平山　大盛　須知　岡野　笹見　阿須賀　三宅

平成21年(2009)の同期会は12月26日でしたが、平山さんから「今回は欠席させていただきます」との返信葉書が11月24日の消印で届きました。悲しい知らせは、その８日後の12月２日でした。

平山さんを偲ぶ会となった同期会には24名が集まりました。

山田　福井　築島　菅広　平田　柳田　須知　奥本　末政　山口　麓
内山夫人　新岡　大盛　光田　岡野　中西　石本　岡島
竹内　阿須賀　笹見　林　亀清楼女将　三宅

「お別れの会」終了後東京ドームホテルのロビーで(平成22年{2010}2月2日)

山田　山口　福井　須知　築島　笹見　光田　大盛　新岡夫妻　奥本　竹内　石本　両祖　麓
内山夫人　岡島夫妻　高瀬　末政　柳田　坪田　三宅

私たちも今年80歳を迎えることになりましたが、東京の修道同期会を今まで続けることができたのも、戦中・戦後の混乱した時代を生き抜いてきた旧友の皆様に支えられてきた賜物なのです。

－2010年2月 三宅利正－

同期会報告

4回生の「石田先生を偲ぶ会」

菊田良三、木下三郎、河野富士雄、内藤明郎　共同執筆（高4回）

石田道俊先生（旧中15回、修道ご在職昭和22年11月～40年3月、社会科）が、昨年11月5日、「グループホームはるかぜ」でお亡くなりになりました。102歳と10か月の超・長寿でした。石田先生は、敗戦直後の混乱時代に同窓の若手財界人が母校復興のための募金活動を展開されたとき積極的にこの活動に協力されました。また食糧事情が劣悪だったこの時期、「生徒が腹を空かせては可哀想」と売店でうどんを売ることに尽力されました。直接教わる機会のなかった生徒の中には、石田先生を「売店のおじさん」と思っていた者もいたようです。ご退職後はご自宅近くの先生の畑の諸作りの会に、子育て世代の卒業生を親子込みでたびたび招待してくださいました。

11月7日のお葬式は家族葬ということで修道学園や卒業生への通知を固く辞退され、ご親族のほかは、伝え聞いたごく少数の者でしめやかにお送りしました。しかし、卒業後もいろいろな時、いろいろな場、いろいろな面で石田先生のお世話を受けた少なからぬ4回生の追慕の念抑えがたく、また先生のご長男が同期というご縁もあり、「石田先生を偲ぶ会」を開催する運びになりました。

「偲ぶ会」は、年が明けた2月16日午後5時半から、広島市中区のメルパルク広島で、ご来賓として石田先生が最後の10年を過ごされた「はるかぜ」の国松浩司様と藤川由加様、それにご長男の石田俊夫君と末のお嬢様安井淑子様ご夫妻をお迎えし、4回生と、石田先生に直接ご縁の深かった亡き4回生の奥様方、併せて42名が参加して実施されました。

受付後遺影に献花して着席、黙祷、来賓国松様のご挨拶のあと、東京から駆けつけた元生徒会長中丸哲夫君の発声で、石田先生が「友の会」初代会長をお勤めになったゆかりの「千福」で献杯いたしました。献杯後は思い出話をしながらしばらく歓談。また石田先生直筆の写経や、喜寿のお祝いに差し上げた短冊張り（約百名の同期生が石田先生に献ずる言葉を書いた）屏風、卒業後いろいろな機会に先生を囲んで写した数多くの写真帳などを見て往時を懐かしみました。7時半、ご親族代表石田君のご挨拶と記念写真撮影で心を残しながらお開きとしました。石田家から頂いたお土産

は、先生ゆかりの干し芋とうどんでした。

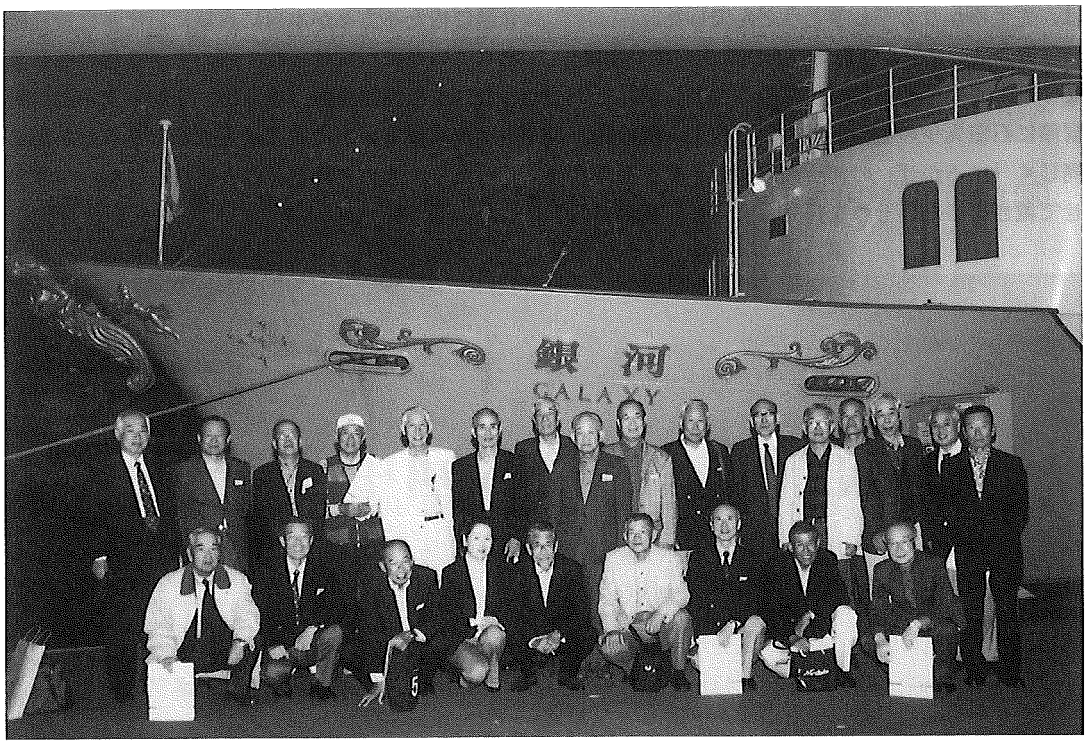
「偲ぶ会」に際して冊子「石田先生の思い出集」を作り、4期生全員に配付することとしました。冒頭に石田先生の主治医野村真哉先生、国松様、同じく「はるかぜ」の河手尚哉様の手記を掲載させて戴きました。それを拝見しますと、高齢者の介護に当たる方々が本当に真摯にお仕事に取り組まれている姿が察せられ、頭の下がる思いをしました。また同期生の「思い出」を読みますと、先生が卒業後もいかに教え子を大切にされたかがよくわかり、改めて師恩の尊とさを心に刻みつけました。

同期会報告

母校訪問（高校8回中学一組）

山本富男（高8回）

我が中学一組の級友、菅久尚武兄が主催する関東修八会熱海総会、平成21年5月17日～19日に広島からも多数参加、その節平成4年の第2回クラス会於宮島岩惣以来、永らく開催していないので、是非第3回を催して欲しいとの事で、帰広後世話人6名（岡原、尾上、河原、桑森、中村、山本）が集い思案の結果、瀬戸内海汽船の協力を得て、銀河号のディナークルーズで懇親会、その夜はプリンスホテルに全員宿泊。翌日、母校訪問、昼食は、八雲富士見町店、食後解散という企画をたて、10月24日(土)・25日(日)の両日に実施。新型インフルエンザで参加不能の級友2名、前回以後、我がクラスの名物男も数人欠けた事が残念であった。前回出席頂いた担任の田中由多加先生はご高齢のため案内を控えさせて頂き、関東より6名、関西より3名、合計25名の参加で、和やかなうちにディナークルーズを楽しみ旧交を暖める事が出来た。母校訪問は午前10時～12時の予定、日曜日にも拘らず、田中事務長さんに、現況説明、校内の案内を心よくして頂き、全員感謝していた。校舎設備とも見紛うようで、階段形式の講堂も仲々立派。安芸の小富士を望む事も出来た。特に充実した資料室には、全員感激、熱心に観賞していた。我々の思い出は旧正門だけとなり、卒業以来という級友も多かった。山田十竹先生の像も新しくなっており、第3代目という説明を受けた。その像を背景に記念写真を撮った。昼食会参加の諸兄が今年72才、是非喜寿にもクラス会をとの要望があり、お互いそれまで元気でいるよう申し合わせ散会した。因みに我々八回生の同期会は、毎年8月8日に設定、大塚淳八郎兄が会長、藤井友義兄が会計という両兄の肝入りで毎回盛会である。関東修八会は菅久尚武兄が中心となり色々な活動、海外旅行や各地での総会を企画、関西や広島からも多数参加している。広島の中学一組では、7家族が集い、もみじ銀行主催のニューイヤーコンサートで新年を迎え、食事を共にする事が恒例となっているが、いづれも永続出来るよう念願している。


銀河
GALAXY

同期会報告

「烈士暮年　壮心不已」

入学50周年記念同期会と峰崎直樹君財務副大臣就任祝い

土　井　和　士（高15回）

「三国志」の曹操が詠んだ「歩出夏門行」と題する詩の一節です。この一節は人生の晩年を迎えようとする私たちの心の中を力強く響き渡り、いつまでも若々しい心を忘れるな、と励ましてくれているように思います。

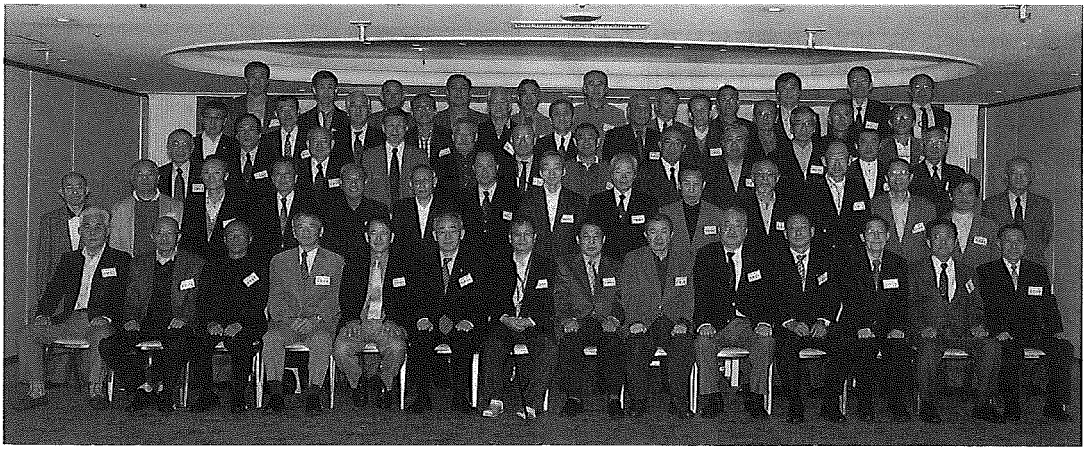
思えば、志学の歳に修道高等学校に入学してから50年が経とうとしています。あの頃は気力・体力ともに優れ、「修道生」という誇りと若々しい心に満ちあふれていました。

あの頃の友と集い、いつまでも若々しい心を忘れないよう、入学50周年記念同期会を平成21年11月15日に開催しました。また、「烈士暮年　壮心やまず」と活躍中の峰崎直樹君の副大臣就任祝いも併せて行いました。

高校入学50年経つ私たちは今年度中に老齢期に入ります。しかし、何も仕事ばかりが人生ではありません。老後には老後の目標をもった生き方があるはずです。そういうものがあれば、いつまでも若い気持ちで人生にチャレンジすることができるように思います。

そのためには、いつまでも自己啓発をしなければなりません。自己啓発は何も現役だけの専売特許ではありません。そして常に新しい自分でもって、旧交を温めたいものだと願つています。

今生きている社会は「情報」化社会と言われています。しかし、実際は「報」のみの社会で、「情」の伝わってこない社会のような気がします。こうした社会であればこそ、私たちの同期会は、「情」をも伝えられる同期会にしたいものだと願い、記念誌を発行しホームページ（http://www.tennis-school.net/shudo15/）を開設することにしました。こうしたことを通して友垣の輪が広がれば幸いです。



勝野　井　国光
大住　馬場
中里　西平　松島
藤原　森下
井川　坂田　名井
北林　北村
桑原(倖)　田原　永井
井谷　桑原(稔)
川口　藪根　米田
大原　田中
森藤　中島　貫名
田中　小田
小池　加用　土井
福原(啓)　横山
福原(新)　宮本　岡崎
湯藤　宇野
林　黒田　峰崎
鈬内　宍戸
岡村　徳永　高原
野間　光村
高杉　吉田　土本
竹中　船本
中下　広中　喜連
三宅　庄野
佐藤　西尾
辻上
小桝
渡邉

同期会報告

『修道31会』30年目の修学旅行
（平成21年5月16日～17日）

豊　田　章　宏（高31回）

修学旅行に先立ち、岩国の和木C.C.でゴルフコンペがありました。仮田君の幹事と石田君のプレッシャーで大分お安くしてもらったようです。心配した雨も軽くて楽しいゴルフでした。

ゴルフ好きは是非ご参加ください

さて、厳島神社と原爆ドームという２つの世界遺産がありながら、実際に広島に住んでいると意外に訪れる機会は少ないものです。昔に比べてずいぶんと小奇麗になった宮島口桟橋に到着すると、潮の香りに混じってフェリー独特のオイルの臭いがしました。匂いは記憶を呼び戻すといいますが、少し懐かしい気持ちで沢山の観光客に紛れて乗船しました。なんだかちょっとした旅人になったような気分で、一緒に乗船した石田君、前田君と近づいてくる赤い大鳥居を眺めながら早速ビールを一杯。気分はますます修学旅行です。

桟橋から厳島神社神殿のすぐ裏手にあるホテル「有もと」まではぶらぶらと歩いて向かいました。途中で本物の修学旅行の生徒たちとすれ違い、土産物屋のガラスに映る自分達の姿に歳を感じる一方、「高３の時、最後の遠足で来たよな」「マラソン大会で走ったのはあっちだっけ」などと記憶はどんどん若返っていきました。

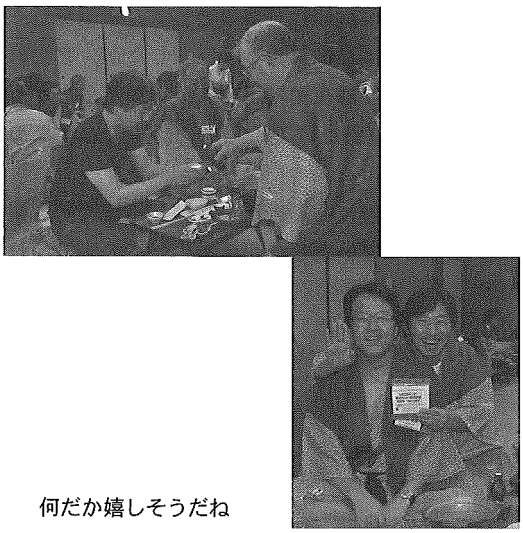
「有もと」は神殿からすぐ近くの好立地にあり、なかなか立派な奇麗な和風ホテルでした。ここの社長も専務も親子二代の修道卒業生。今回の修学旅行でも相当無理を聞いていただいたものと思います。（夜遅くまで騒いですみませんでした）また、宮島といえば「もみじ饅頭」ですが、これまた修道の先輩「やまだ屋」から大量に差し入れをいただきました。（ごちそうさまでした）改めて同窓生に感謝です。

さあ、まずは浴衣に着替えて現世を忘れ、吉岡君手作りの特製名札を胸につけて宴会場へ向かいましょう。よく見ると校章や担任の名前まで書き込んである手の込んだ名札です。宴会場のステージには藤本君手作りの「修道魂」の大旗が掲げられています。学年カラーにあわせてちゃんと黄色い布で作ってありました。

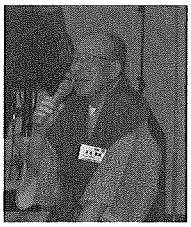
酔っぱらう前に集合写真は撮っておくことに

座敷は徐々に懐かしい顔、顔、顔で溢れていきました。不思議なもので白髪でも薄毛でも顔だけは昔のままに見えるものです。お世話になった恩師の中から木元先生、片山先生、原本先生がご参加下さいました。あの頃本当に恐ろしかったK先生の顔にも温和な皺が刻まれていました。

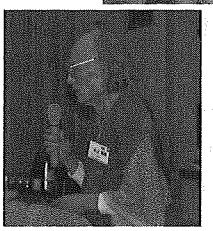
久保田君の開会の挨拶に続いて、今回最も遠い沖縄から参加してくれた益森君に乾杯の音頭をとってもらいました。その後、各組ごとに点呼をとらせていただき、昔懐かしい写真をパワーポイントでスクリーン上に映し出していくと、笑いや突っ込みも入りながら会場はだんだんと盛り上がっていきました。先生方のお話の中には、当時では絶対に聞けなかったであろうウラ話もありました。なんだか遠い存在だった先生方と大人同志の話ができたようで不思議な気分でした。その後は本当にあっという間に時間が経ち、3時間近い宴会は皆で肩を組んで校歌を斉唱し三本締めでお開きとなりました。



何だか嬉しそうだね



木元先生



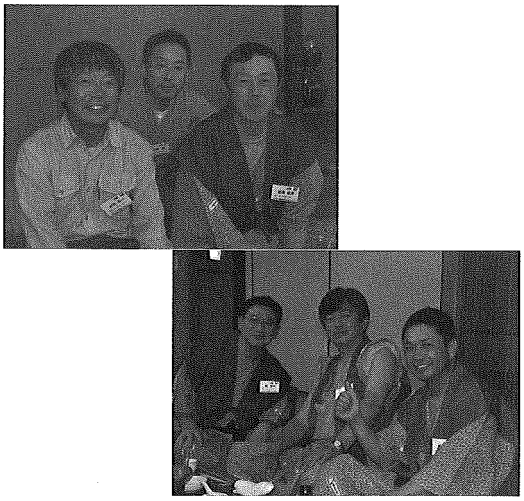
片山先生

原本先生

クラスの枠を超えて盛り上がっています

校歌はちゃんと覚えてますか？

以下に北平君が撮ってくれた宴会場でのスナップ写真をいくつか載せておきます。ご覧になっていただければ場の雰囲気は言葉で表現しなくてもお察しいただけると思います。（本当に時間が経つのを忘れましたね）



全員の写真を紹介できなくてすみません。
しかし、皆さん楽しそうでした

修学旅行の恒例の注意事項として、布団蒸し、枕投げ、寝たばこは禁止していましたが、宴会終了後も各部屋では夜更けまで笑い声が絶えなかったようです。(男だけでこんなに話すことがあるでしょうか。。。)

翌朝は朝食後に厳島神社を参拝し、皆で記念撮影をと計画していましたが、あいにくの雨で流れ解散となりました。代替え企画を用意できておらず、参加された皆様には申し訳ございませんでした。次々とホテルを出て行く後ろ姿を見送っていると、20年ぶりに再会したのに「じゃあまた。お疲れさん」とさらっと手を振って帰っていく友もあり、「またって、今度はいつのことじゃろ」と名残惜しさの反面、おかしさも込み上げました。

さて、気がつけばもうすぐ五十路を迎える私達です。それぞれが道は違えども社会の一員として厳しい状況下で頑張っていると思います。成果主義が叫ばれる中で、一見無駄に見える時間を私達は宮島で共有しました。しかし、そこには私達の原点である浴衣姿の友情があったと思います。また明日から頑張ってみよう。何歳になってもそう思えるような時間を持てること。それが31会であって欲しいと願っています。

今回残念ながら参加できなかった皆さんも、9月5日の同窓大会か1月2日の定例31会には是非とも顔を見せて下さい。卒後30年経った今でも初参加の人はありますから、お誘い合わせの上でどうぞ遠慮なくご参加ください。

『修道31会』世話人会

石田晃司、岩田秀生、仮田典久
久保田貴八郎、　豊田章宏
藤本良史、向田哲規、毛利雅哉
山崎健次、吉岡敏彦　　(50音順)

追記

2009年度修道学園（中・高）同窓大会にて母校に寄付

卒業30年を記念して同窓大会において、我々31回生は母校に寄付をいたしました。

「来賓のご挨拶が終わり、いよいよ我々31回生の登壇場面がやってきました。藤本君が作ってくれたあの黄色い「修道魂」の旗をバックに全員で壇上に上がり、久保田君が代表として会場の重鎮の方々よりも長く立派な挨拶をし、皆さんからお預かりした貴重な寄付金を母校のために使ってくださいと田原校長先生に手渡しました。寄付金額は決まったものはないそうですが、我々は「修道31会」になぞらえて31万円としました（前例も同等の金額だったそうです)。後日、田原校長先生からは31会宛に丁重なお礼状が届きましたので申し添えておきます。」

[第31回生への2009年度修道学園（中・高）同窓大会報告記より]

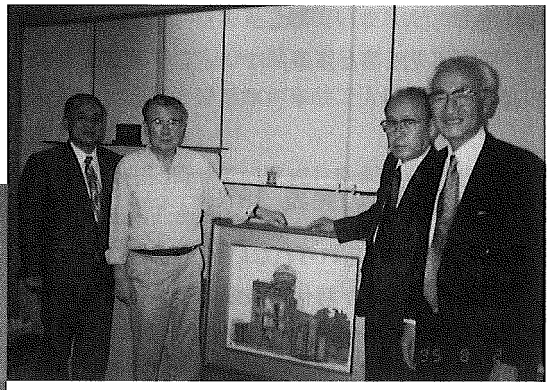
修道魂と刻まれた学年カラーの黄色旗の前に集合

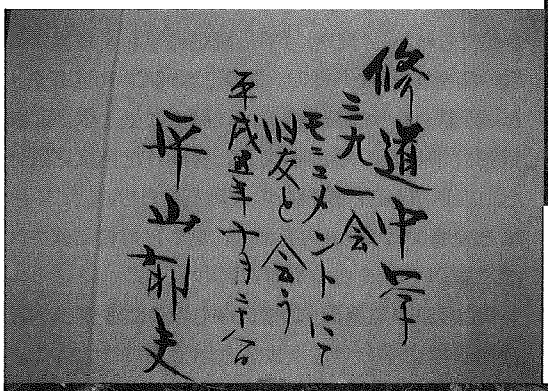
特別寄稿

平山郁夫画伯と「修道」

修道学園史研究会　仲　井　正　美（元事務長）

思い出に残る平山郁夫画伯と修道





（上）　鎌倉アトリエにて　平成７年８月２日
　　畠、平山画伯、小尻、三桝（写真提供：仲井）

（左）　本校に残された平山画伯の色紙

平山郁夫画伯来校記念　被爆煉瓦保存記念碑前（平成５年10月28日）

後列左から（敬称略：職名のない人は三九一会メンバー）
　田中庶務課長、内山事務局長、畠教頭、多田教諭、平山助成氏、平賀、平賀夫人、仲渡教諭
　岡村、石本、奥本、新谷夫人、尾越、田中教頭、佐藤、仲井事務長

前列左から
　小尻、東、北川専務理事　（碑文）　平山郁夫画伯、河野校長、三桝、田辺、阿曽沼

昨年（2009年）12月２日、平山郁夫画伯が亡くなられた。シルクロードをはじめ世界に画題を求めて、平和への祈りと故郷への愛着を絵筆にこめられた生涯だった。

とくに「修道」とは被爆されたとき、修道中学３年に在学されており、自ら絵の道を決められた時期だったこともあって、特別の思いを持っておられた。

「平山郁夫画伯と修道」についてその足跡を振り返ります。

「広島生変図」の発表 1979

広島にとっては忘れられない「広島生変図」は、平山画伯の修道中学時代の被爆体験から34年経った1979（昭和54）年に発表された。

この絵画をめぐって旧制修道中学の同窓の絆が再燃したと言われている。同級生三桝積さん、小尻正俊さんの二人は、「この絵を描いたのは千田町の修道寄宿舎で同室であった平山君に間違いない。」と確信し、恩師景山英俊先生に報告に行くことになる。

この「広島生変図」は平成になって、被爆者の思いを広く一般に公開し、後世に伝えようという運動に発展した。約3000万円の市民からの募金によって、平和記念館地階の大ホールに設置された「広島生変図陶壁画」は修道三九一会を中心に修道学園同窓会（森本弘道会長、当時）も全面的に協力することとなった。

この運動の提唱者は小林康司さん（元ＮＨＫ勤務の被爆者）であるが、募金委員会の事務局長は深崎敏之さん（旧中38回）であった。

ドキュメンタリードラマ「炎の絵」放映　1992・9・15

この運動が契機となって、ドキュメンタリードラマ「炎の絵」が制作、放映されることになる。このドラマは、ドキュメンタリードラマという新しい手法によって平山画伯が絵の道に進まれる事になった修道中学時代のエピソード、そして平和を求めて祈りを込めた「広島生変図」制作までを修道中学のロケなどをまじえて構成されている。

このため、平山画伯、恩師景山先生、三桝さん、小尻さん本人がドラマに登場する。エキストラでいがぐり頭の修道生も出演している。「炎の絵」は朝日テレビから1992年９月15日全国放映された。

被爆レンガ記念碑建立 1993

1992（平成４）年、平山画伯らが修道中学三年生のとき学徒動員中に被爆した旧陸軍兵器支廠が取り壊されることになり、このレンガを母校修道に持ち帰り、三九一会の皆さんの浄財によって記念碑が建てられた。はじめ「平山画伯に平和を象徴する鳩の絵を描いてもらって、この記念碑にはめ込もう。」という話もあったが、結局は「歴史に生きる　東京芸術大学学長　平山郁夫」と書かれた色紙を戴いた。広島市からは市役所の被爆石をもらい、この色紙と被爆レンガの由来を銅版に刻し、母校に残された。

碑は「原爆慰霊碑」の横に今も静かに建っている。

被爆50年に「原爆ドーム」寄贈 1995

平山画伯は広島に帰られるたびに母校修道に立ち寄られいくつかの筆跡を残しておられる。被爆50年の年、かねてお願いしていた絵画「原爆ドーム」が修道へ寄贈されることになった。そのご原爆ドームがユネスコの世界遺産に登録されたが、平山画伯も原爆ドームの遺産登録に尽力されたと聞いている。

絵画は、三桝さん、小尻さんの両先輩と畠校長（当時）と私（当時事務長）の四人で鎌倉の自宅へお伺いして戴いて帰ったことを今でも鮮明に覚えている。

希望の光　安芸の小冨士 2003

校舎の建替計画が具体化してきた頃、平山画伯は「以前に寄贈した原爆ドームが素描なので、本格的な絵画を是非母校へ」と考えておられたようであるが、同窓会長（当時大下龍介会長）からお願いに行かれたところ、現在の「安芸の小冨士」

の構図をその場で話されたと聞いています。

多忙の中、広島にこられた時は、必ず時間を作って、修道を訪問していただいた。プリンスホテルからのスケッチ、旧校舎屋上から安芸の小富士を見て「希望の光　安芸の小富士」の構想を練られている。広島では三桝さん、小尻さんら三九一会の同期の皆さんがいつも同行された。

2003年9月13日、「希望の光　安芸の小富士」陶板画の除幕式が平山郁夫画伯を迎えて本校で行われたことは、まだ記憶に新しい。

修道に残されたもの

平山郁夫画伯が「修道」に残されたものは、絵画「原爆ドーム」、色紙「歴史に生きる」、陶板画「希望の光　安芸の小富士」のほか紀行文「被爆50年に寄せて」、追悼文「景山英俊先生との思い出」ドキュメンタリドラマ「炎の絵」などがある。

しかし、これらの絵画に勝るとも劣らぬ大きなものを残された。「小さな円を正確に描くよりも、もっと大きな円を描くこと」という平山郁夫画伯の平和、祈り、歴史に対する考え方である。

「豊かになって心が貧しくなった我々日本人を、恥ずかしいと反省することからすべてが始まるのではないだろうか。」(文化勲章受章記念出版　平山郁夫　「絵と心」)

謹んでご冥福をお祈りします。ありがとうございました。

「同窓会報修道」に掲載された平山郁夫画伯のことば

平安建都1,200年を機に

「平城京文化の特色は国際性、そして平安京は海外の影響を消化したうえでの純日本文化です。シルクロードの日本の美そのものを探し求める舞台だったといえるかもしれません。」さらに「中国絵画から大和絵へ、漢字からかな文字へと、他者を融合して独自のものを創造する日本文化の特質も、平安京で培われたのではないでしょうか。」とも語る。(平安建都1,200年を機に平安京を題材にした対策に取り組む 毎日新聞 ひと1994・2・1 修道1994・5・10)

被爆50年に寄せて

50年前の8月6日が昨日のように、強烈に思い出されます。私は、当時修道中学3年1組の生徒でした。学徒動員で広島陸軍兵器支廠で作業中に被爆しました。広島上空をB29が飛来し落下傘を投下するまで、空を見上げていました。爆発の瞬間は数秒差で傍らの小屋に入りました。物凄いせん光に兵器廠の弾薬庫が事故で大爆発したと思いました。(後略)」

(被爆50年に寄せて　平成7・8・6　修道1995・9・1)

瀬戸内文化シンポジューム

「幼いころ美しい自然の中で遊んだ思い出」を語った。また、絵を画くに至ったいきさつや各国を旅して感じたことについて「日本文化の特質を異質な文化に対して説明し、わかってもらった事が本当の意味での国際化」と指摘。「美術を通して平和を願い、未来へ向かって進んでいきたい。」と締めくくった。(瀬戸内文化シンポジューム1995・7・11　修道1995・9・1)

ユネスコ特別顧問に就任して

「民族や宗教対立による紛争で破壊の危機にある文化財は多い。中立的な立場で保護、保存に当る事が紛争解決につながると信じ貢献したい。」(ユネスコ特別顧問の就任に際して　中国1995・9・29　修道1996・2・1)

サラエボの光

「死や不幸を描くのは私の表現方法ではない。ハスの花は画くが泥は描かない。」と1枚をのぞいてヒロシマを絵にしないできた平山氏。それが街角の少女の姿にハスの花を感じる。壊れた自宅跡でバラを育てる老夫婦に絶句、焼けこげた十字架を作った画家に感動する。(「サラエボの光」NHK1996・10・6　修道　1997・2・1)

原爆ドーム世界遺産に

広島県から原爆ドームと厳島神社が一挙に世界遺産に登録され、ゆかりある者の一人として喜びにたえない。人類史上初の被爆のあかしであるドームが今後は二度と核を使用しないという決意の象徴として世界発信する意義は非常に大きい・（後略）（中国1996・12・7　修道1997・2・1）

原点は瀬戸田の光

「原点は瀬戸田の光」と故郷への思いを語り「島や瀬戸内の自然と生活、歴史から私の画家としての感性が生まれた」と話した。（ＮＨＫさわやかインタビュー出演1997・6・1　修道1997・9・1）

景山英俊先生の思い出

画家になって、仏教伝来やシルクロードに関する作品を多く描いていますが、中学生の東洋史が第一歩です。古代中国の国名や王朝名も習ったが、今も基礎となり役に立っているのも、先生に教えていただいたお蔭です。（景山英俊先生の思い出　修道1998・2・1）

除幕式の挨拶

「二度ばかり安芸の小富士を写生にまいりました。特に昨秋、宇品に近いプリンスホテルで写生をしておりますと、朝早く起きたとき雨が降っておりました。これは、似の島も見えませんし今日は折角待機して、日の出から描こうと思っていましたところ、突然一点にわかに太陽が出てきまして、まさしく校歌にある「安芸の小富士に茜さし、希望の光輝けば、狭霧に迷う雲晴れて」のとおり、狭霧の中に富士が現れて、今だと言うことで絵を描きました。」（2003・9・13　陶板画「希望の光　安芸の小冨士」除幕式の挨拶　修道2004・3・26）

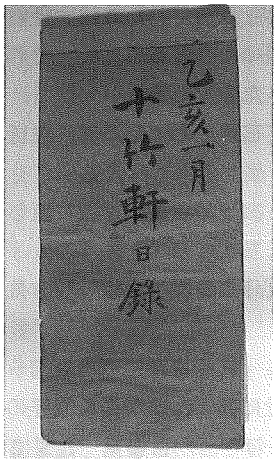
高い志を掲げて一歩一歩努力すること

平山画伯は「先輩からのメッセージ」のなかで「後輩の皆さんへ」と題して「どんな道に進んでも高い志を掲げて一歩ずつ努力することです。継続することが質に転換され、才能を発揮することに繋がります」と述べておられる。（先輩からのメッセージ　2008）

特別寄稿

「乙亥一月 十竹軒日録」(海軍兵学寮時代・明治8年)を読む

修道学園史研究会　畠　　眞　實(高7回)



はじめに

今回紹介する日記の表紙には、「乙亥一月　十竹軒日録」(左の写真)と書かれている。「乙亥」は西暦1875年、明治8年であり、「乙亥日録」は明治8年1月1日から12月3日までの日記で、先生が43歳の時にあたる。

小鷹狩元凱の「山田十竹先生に七十弐年前に学ぶ」((「芸備之友」第二十五巻　第二百三十七号)よれば、「明治四年の七月、廃藩置県になったが、人々安定せず、頑迷な人民が朝廷の思し召に納得せぬ傾向があった、此の時先生は是等の頑迷な徒を文明に赴かしめるには、新聞紙の力に依るの外ないと考へられた。所が其頃新聞を発行するにも、活字と云ふものがあるではなし、どうしたら宜からうと考慮して居る時、幸ひ前に広島藩廳に於て、布令等を発する爲に不細工ながら木製の活字があった。それを使った出来ぬことはあるまいと云ふので、新県廳に交渉したが貸さぬ、そこで県廳の出来事を新たに一般に知らす爲に、新聞と云ふものを拵へて、さうして頒布すれば大いに今日の朝旨を伝達するに便宜であるから、それで県廳の用務をすることを主とすると云ふ名義で、貸与へて貰ひ、一方では県廳の御用を受けてや云ふことを兼ねて、新聞を刷ると云ふことに相成って、県廳の隅を借用して新聞を発行した其新聞は初めは一箇月に一回発行、其名を「日注雑記」一名「広島新聞」と云ふものを発行した。是が広島に於ける新聞の嚆矢となったものである。先生が文明に向かって飽迄も発展せしめんとする心から新聞が発刊せられ、それが継続されて今日の如く発達したのは全く先生の賜物と言はなければならぬ。しかし、追々時勢の変化に連れて、先生も遂に明治五年冬東京に来られて、色々文事に依って官にも就き私宅でも教鞭を取られ、飽迄も教育事業で終始された。」とある。少し長く引用したが、藩校「修道館」が廃藩置県によって廃止されて以後の山田養吉先生の様子がうかがえる。つまり、「明治五年冬東京に」上られたということである。

そして「海軍兵学校沿革」(海軍学校編　復刻原本大正八年刊　原書房)によると、「明治7年末現在職員」の項に「十二等出仕　幼年皇学　山田養吉」と名前が記されている。山田養吉先生は明治7年から明治14年、広島藩最後の藩主であつた淺野長勲の要請で広島に帰られるまで、海軍兵学寮(明治9年[1876])8月31日海軍兵学校と改称された。)海軍兵学校の教官として勤められたのである。

海軍兵学寮・海軍兵学校時代の日記は明治8年の、この「乙亥日記」だけしか現在保存されていない。したがって、この一冊はこの時代の先生の生活を知る上できわめて貴重である。

ことわり

＊日記の中に出てくる人名のうち海軍兵学寮関係の人については、「海軍兵学校沿革」(明治百年史叢書　編者　海軍兵学校)の明治7年末現在の職員名簿によった。(明治8年は記されていない。次は9年)その他の人名については出来る限り調べたが、明らかにすることのできなかったものも多い。

＊原文が短くて、その意味が比較的分かりやすいと思われるものについては、特に大意を示していない。

＊日記の中に、その日の記述とは直接には関わり

がないと思われること（網掛けをした部分）をいくつか記してある。これについてはその意図がよく分からない。

乙亥一月　十竹軒日録

（一月）一日

上寮拝年　十一時帰　与松波服部数子詣寮官諸公　午後與北堂詣写真店　不写　詣神明前

購得一郎所冠帽子　是日賜酒膳料一方

（兵学寮に行き、新年を賀す。松波・服部さん及び数名と学寮の諸先生方のもとを訪れる。午後母上と写真館を訪れる。写真は写さない。神明前に行き、得一郎の被る帽子を購入する。この日、酒膳料一方（？）を賜る。）

注　・松波　　松波直清　少助教　幼年皇学　・服部　服部章蔵　小教授　幼年英学、数学　・北堂　①昔、中国で、家の表座敷の北にある堂。主婦の居室。　②母または、他人の母を敬っていう語。母堂。

・得一郎　山田養吉先生の長男　明治17年７月11日、泉邸裏の川で水泳訓練中水死

参考

「十竹軒詩鈔」に「抵東京」と題した漢詩が載せられている。

　抵東京　　「甲申春初　余拉書生一人入東京、秋初又拉七人東京、時距長児得一郎死、僅月餘日也」

＊得一郎の水死は、明治17年７月11日のことで、先生が七人を引率して広島を出発されたのは、明治17年８月15日である。

【大意】「東京に抵る」　明治17年の初春、私は書生一人をつれて東京に至った。その秋の初め、また七人をつれて東京に至った。長男得一郎の死から時を距(へだ)つこと、幾ばくの月日もない。

注

＊「拉七人」　東京の法科学校の入学試験受験のため優秀な門下生を連れて上京した。この七人うちの一人秦野健二と明治８年に生まれた先生の長女春が結婚することになる。

＊「僅月餘日」　明治17年７月11日に得一郎が亡くなり、その年８月15日には、受験生を引率して広島を出発された。

＊「抵東京」「生来士気自崢嶸（そうこう）　雖哭亡児豈喪明　欲貢人材報国　一年両度入東京」

（生来士気自ずから崢嶸たり　亡児を哭すと雖も豈に喪を明らかにせん　人材を貢して国に報いんと欲す）

【大意】生まれつき気力は挫けることはない。亡き児のことを大声で泣くといえどもこどもをなくして悲しみのあまり盲目になったという子夏のようにどうして失明などしょうか。わたしは、優れた人材を推挙して国に報いようと思う一心、それでこの一年に両度上京したのである。

　また、兵学寮において宿直をしている時、生徒を詠んだ漢詩もある。

「夏夜直海兵学寮口占」（夏の夜海兵学寮に直して口ずさむ）　口占（こうせん）　くちずさむ

一百書童読夜深　不知紅汗点青襟　大抵婉孌（えんれん）非凡骨　孰是東洋納爾森（ねるそん）

（一百書童読みて夜深し　紅汗青襟に点（したた）るを知らず　大抵婉孌にして凡骨に非ず　孰か是れ東洋のネルソンたらん）　語句　・一百書童　たくさんの年若い生徒　・婉孌　年若く美しい

二日

至諸友拝年

三日

亦然

四日

宿直

五日

賜新年宴酒膳料

六日

亦訪諸友拝年

七日

自客冬十二月十日兵学寮書生放業　至今日皆帰寮　同僚皆上寮謀事

注　客冬　昨年の冬

（昨年の冬十二月十日よりより兵学寮生徒は休業。今日に至って皆帰寮した。同僚皆学寮にやって来て諸事を謀る。）

参考

規則では、夏月休業は７月15日から８月26日まで、冬月休業は12月10日から１月７日までとなっていた。

八日

亦上寮　午前罷　　（罷　まかる　退寮する）

九日

主上幸兵学寮観盪舟水雷火大帆前調練大砲稽古諸技　聴麻生講書　今日当直小野邦尚花房職而余則昨直　以今日海軍始諸生戯暴　同寮（僚か）皆忌直之當今日而余免之喜則可知也　賜酒膳料

（天皇が兵学寮にお出ましになり、盪舟、水雷、火大帆前調練、大砲稽古、諸技をご覧になる。麻生先生が書物を講読されるのを聴講する。今日の当直は、小野邦尚氏と花房職氏であるが、わたしは昨日の当直であった。今日は海軍始めの日で生徒みんな大騒ぎをして楽しむ。したがって同僚は今日の日に宿直に当たるのを嫌う。だから、わたしがこれを免れていることの歓びを察知すべきである。祝いの酒膳料をいただく。）

注

・主上　「しゅじょう」古くは、「しゅしょう」。天皇の尊称。かみ。うえ。至尊。・幸　天皇のお出まし　・盪舟（とうしゅう）　船を陸で動かし移す　盪→うごかす　うごく　・水雷　多量の爆薬を強固な容器につめ、水中で爆発させて敵の艦船を破壊する兵器　・火大　「大」は一切のものに遍満し、それらの拠り所となる本原の意（仏語）地、水、火、風の四大を説き、密教では五大、六大を説く。その一つ。　・帆前　帆をはり、風の力を利用して航海する洋式の船。西洋型帆船。

・調練　兵士を訓練すること　・麻生　麻生武平　中教授　教授掛　講堂掛　・小野邦尚　十一等出仕　幼年皇学　・花房　花房　職　十一等出仕　幼年皇学　・今日海軍始　明治２年９月18日海軍操錬所創設。明治３年１月10日、海軍操錬所の始業式を行う。これが「海軍始めの式」の起源である。・戯暴　従来、兵学寮の生徒の気風はバンカラであったようで、大騒ぎをして楽しむといったことをいうのであろうか。

参考

海軍兵学校沿革史に当日の行事に関して次のように記されている。

「海軍始メニ付キ午前十時兵学寮ヘ臨幸アリ　奉迎奉送ノ式ハ例年ノ如シ　天覧ニ供シタルハ 第一競漕操練　第二省内ニ於イテ水雷点火　第三同所乾行艦ニ於イテ帆前調練　正午御昼饌　午後一時中教授麻生武平海軍歴史（子ルソン伝）を講ズ　午後二時式挙テ還幸アラセラル」

＊なお、「海軍兵学校沿革」の明治七年末現在職員の項には、上記の小野邦尚、花房　職の記載につづいて、十二等出仕　山田養吉の名が記されている。因みに、「山田養吉先生門弟名簿」（明治44年発行　1148名収録）に当時海軍中将であった加藤友三郎の名前が載っている。友三郎の兄、加藤種之助は藩校で山田養吉先生から教えを受けていることはその頌徳碑の先生の撰文からも明らかであるが、友三郎がどこで先生の教えを受けたかははっきりとした記録で確認できない。12歳で兄に連れられて上京した友三郎は明治６年（1873）10月27日、13歳で海軍兵学寮に入学している。これについては、同じく「海軍兵学校沿革」の明治７年の記載に「予科生徒ニ各学期修業ヲ命ス　第二期ニ」とあり、その中に加藤友三郎の名前が見える。したがって、山田養吉先生との師弟関係は少なくともこの明治７年以降先生が海軍兵学寮におられる間にあったことは明らかである。友三郎は明治13年（1880）12月１日に海軍兵学校を卒業し、12月17日少尉補に任じられている。先生が我善坊の自宅で塾を開いておられたことは後に挙げる花井卓蔵の「私は九歳にして山田十竹先生に学ぶ」という文章にも述べられているが、友三郎がこの塾に通っていたかどうかは明らかでない。

十日　　日曜　風

欲買墓田至青山　以風塵不果　新聞中所挙　昨年国家所挙

鎮佐賀乱　問台蕃之罪　全支那之和約　開神阪之鉄道北海之電信　定士族之禄制許奉還　贈馬関償金於会盟四国　与米国結郵便約

（墓地を買おうと思い、青山に行く。風塵が強く果たせなかった。昨年国家がなしたことで、新聞に掲載された事項を掲げてみる。）

注

・昨年国家所挙　昨年とは、明治７年（1874）のことで、この年の国の大きな出来事を列挙している。

・鎮佐賀乱　３月平定　２月14日に乱が起きる。江藤新平を領袖とする不平士族たちの反乱　・問台蕃之罪　８月１日　台湾征討問題で大久保利通

を清国に派遣。1871年琉球人54名が台湾に漂着し殺されるという事件があった。

・全支那之和約　10月日清互換条約調印　台湾（清国の国領であった）問題で清国が日本へ賠償金を支払うというもの　・定士族之禄制許奉還　明治（1873）秩禄奉還の制を設け、奉還者に就産資金として禄の数年分を、半額は秩禄公債で一時に下付。　・贈馬関償金於会盟四国　イギリス、フランス、オランダ、アメリカの四カ国に長州藩外国船砲撃事件に対する賠償金支払等の締結（幕府の支払の残りを明治政府が支払う）　・与米国結郵便約　二国間条約で郵便物交換条約を締結

十一日　　月曜　晴

宿直　以机案之具未復　故生徒未就業　許散歩

（宿直。机などの用具がまだもとの状態にもどっていない。よって生徒はいまだに学業についていない。散歩を許可する。）

注

・机案　「机」「案」ともに机　・復　もとの状態にもどる　もとの状態にもどす

十二日　晴

生徒始就業

十三日　水　晴

粟津公自客冬疾至今日　始上寮　夜封與木原章六長氏父子及士恵之書

（粟津公は、昨年冬より病気になられ、今日にまで及んでいる。始めて兵学寮に出勤する。夜、木原章六といっしょに長氏父子及び士恵さんへの手紙の封をする。）

注

・粟津公　粟津高明　中教授　新寮教授所（予科）

明治３年12月28日現在職員、兵学中助教、評議曹、週番通直、英学、英学教授書取調　として記載。明治４年、海軍少佐兼兵学少教授

明治５年、海軍中教授　寮監として記載されている。

この人のところには度々行かれている。終わりに人名事典からの引用を参考としてあげているが、概略を紹介すると、天保９年（1834）生まれで、天保４年生まれの先生より５歳年下になる。粟津は桂二郎とも称し、膳所藩士の子である。明治元年（1868）に横浜で宣教師バラより洗礼を受けていて、明治６年には築地に東京公会を組織し、ついで麻布の自宅に新しく日本教会を創立した。ここで毎晩、自ら説教をした。

明治２年（1869）大蔵省に出仕し、ついで海軍兵学寮で英語を教授するかたわら明治７年ごろから日曜日に幼年生徒へキリスト教を講義していた。独立伝道者としての生涯を明治13年（1880）10月に閉じた。43歳。

・士恵　どういう人物なのか、まだ掴み切れていない。先生の日記「十竹軒日録　自慶応戊辰（改元明治）八月朔」の九月廿一日の条に「以士恵之発　廃上曩　未牌士恵発　余送之　（以下略）

廿二日　朝至本多氏謀士恵出游」などの叙述があり、士恵から手紙が来たということも幾たびか述べてあるところをみると、かなり親しい間柄であつたと思われる。浪華に遊学したものと考えられる。今回の日記にも浪華の士恵との書簡のやり取りが書かれている。

十四日　木　晴

直於兵学寮　送書於大森俊造告学寮巡吏之試験当於明日

（大森俊造に学寮巡吏の試験が明日あると手紙を送って告げる。）

十五日　金　晴

以明日休暇夜飲意太安

（明日は休暇なので夜飲む。こころ大いにやすらかである。）

十六日　土　晴

訪宝田竹田日就社不在中永峰君見過

（宝田、竹田を日就社に訪ねる。不在中。永峰さんが立ち寄られた。）

注

・永峰君　永峰秀樹　十二等出仕

十七日　日　晴

直於兵学寮

十八日　月　晴

夜観永峰秀樹之文

十九日　火　晴

夜亦永峰氏之文

廿日　水　晴

直於兵学寮

廿一日　木　晴

郷書来報家園将為官有之状
（郷里から便りが来た。家の園庭がまさに官有となろうとしている様子を知らせている。）
注
・郷書　郷里からの便り
廿二日　金　朝陰　晴
観参河万歳
注
・参河万歳　三河地方を本拠とした万歳。烏帽子に大紋を着た太夫と鼓を打つ才蔵と家々を廻って祝言を述べ、こっけいな掛け合いを演じた。国の重要無形民俗文化財
廿三日　土　晴
断髪価銭百二十五文　夜直於兵学寮　桜田火至廿五日詳之
廿四日　日　雪
朝帰
廿五日　月　晴
訪服部氏　賀佐久間子挙男
注
・服部　服部章蔵　少教授　幼年英学、数学　・佐久間　佐久間国安（明治9年）　機関士副のことか　・挙男　男児を出生する
廿六日　火　晴
朝造餅午前上寮直
廿七日　水　晴
以招魂祭学寮放業　訪橘道守　借書籍年表八代記二書　飲後観梅　四五樹盛開
注
・招魂祭　死者の霊を招き寄せてとむらう式典。招魂社で行われる、国事に殉じた人々を弔う祭典。各地の護国神社で行われるが、ふつう東京の靖国神社であ行われる春季大祭、秋季大祭をさしている。　・橘道守　十四等出仕　幼年皇学
廿八日　木　晴
士恵寄書托藤井秀雄男秀堅　秀雄神奈川県貫属爲大坂府少属　秀堅年一六又
（藤井秀雄男秀堅托して士恵に手紙を差し出す。秀雄は神奈川県貫属で、大坂府少属となった。秀堅は年令一六歳いくつ。）
注
・貫属　地方自治体の管轄に属する。　貫は戸籍
・又　数詞の端数の上につける。又＝有
廿九日　金　雪
上直
（直にのぼる　当直にいく）
三十日　土　晴
藤井秀堅来　供酒
注
・供酒　酒をもてなす
三十日　日　晴
夜谷口大善二生来　善口生応海軍水兵本部之試
（夜、谷口、大善の二君がやって来た。大善・谷口くんは海軍水兵本部の試験に応募する。）
二月一日　月　晴
午前上直
二月二日　火　晴
至宝田氏質栄華物語
（宝田氏の所へ行き、栄華物語のことについて質問する。）
注
・質　ただす　質問する
・栄華物語　栄華物語　平安時代の歴史物語。作者は正編が赤染衛門、続編は出羽の弁などとする説があるが、未詳。正編は藤原道長の栄華を中心に、宮廷、貴族に関するできごとをかな書きで物語風に記す。
三日　水　晴
撒豆追俗礼
（豆撒きをする。世間の風習に従う。）
注
・撒　まく　・追（既成の道、先人の跡など）そのまましたがっていく　・俗礼　俗例のことか　世俗のしきたり　節分の豆撒きをしたということ
四日　木　晴
午前上直　軍医寮報生徒齋藤錠三郎病勢旺盛
（午前当直勤務。軍医寮が生徒齋藤錠三郎の病状が重いことを告げる。）
注
・齋藤錠三郎　明治3年に「予科二期ニ修業命ス」と加藤友三郎と共に名前が記されている。
五日　金　晴
軍医寮報死錠三郎　詣粟津公　告之以公之命詣佐々倉公　日没後帰

（軍医寮が錠三郎の死を報告する。粟津公のところに伺う。粟津公の指示で佐々倉公にこのことを報告する。）

注

・佐々倉公　佐々倉桐太郎　海軍兵学寮　権頭

明治８年12月17日　卒死

六日　土　風塵

午前詣宝田 昨年来始有此風　葬錠三郎

（午前、宝田氏を訪れる。昨年来、これが習慣になっている。錠三郎を葬る。）

注

・此風　この習慣

七日　日　晴

上直

八日　月　晴

午前五時挙女

注

挙女　女の子を産む

九日　火　晴

報土井子来　余不在　不見

十日　水　陰

午前上直

十一日　木　陰　寒

以紀元節賜暇　○藤井秀堅報寄寓小川町通猿楽丁二丁目十五番地矢澤栄三家

土井中西二子来　小鷹狩子亦来

注

・紀元節　明治５年（1872）11月15日、神武天皇即位の年を紀元とし、即位日２月11日を祝日にすることを決定。　・小鷹狩　小鷹狩元凱（もとよし）　山下弘毅の三男で、広島藩士小鷹狩正作（通称　介之丞）の跡を継いで養子となった。元凱は安政７年15歳の時、13歳年上の山田養吉先生の門に入って学問をならったという。

十二日　金

以昨日爲紀元節賜酒膳料　○報女之生於東京府

（昨日紀元節であったので、酒膳料をいただく。女子の出生を東京府に届ける。）

十三日　土　晴

午後五時上直　至日蔭丁購史記始把翻訳之筆　夜亦創人名字類之書

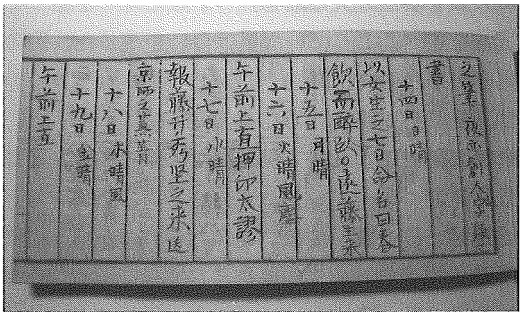
（午後五時当直に出勤。日蔭町に行き、史記を購入し、始めて翻訳の筆をとる。夜また人名字類の書を創（つく）る。）

注

・史記　中国の正史　130巻　前漢の司馬遷撰　漢書をはじめ後世の正史。「日本書紀」などの模範となった。

・把　とる　にぎる　にぎって持つ

十四日　日　晴　以女生之七日命名曰春　飲而酔臥　○遠藤来



（女の児が生まれ、七日目の七夜に当たるので、「春」と命名する。祝い酒を飲んで酔うて臥す。）

注

・遠藤　後に掲げる花井卓蔵の文章の中に出てくる、「遠藤君」のことであろうか。

十五日　月　晴

十六日　火　晴　風　塵

午前上直　押印太謬

（押印、大いに誤る。）

十七日　水　晴

報藤井秀堅之来　送京師之蕪菁

（藤井秀堅の来訪を知らせる。京都のかぶを送る。）

注

・京師之蕪菁　京のかぶ

十八日　木　晴　風

十九日　金　晴

午前上直

廿日　土　暮雲

粟津公以聖書講義見招　至者九人　岸田金香亦至　○佐久間子来

注

・粟津公以聖書講義見招　粟津氏が自宅での聖書の講義に招かれたのである。

廿一日　日

大雪　終日不止　積八寸
廿二日　月　晴
以招魂祭学寮放業　早朝上直
（招魂祭で学業は休み）
廿三日　火　晴
小田行蔵見訪　○始試
注
・見訪　訪ねられる　・始試　試験が始まる
廿四日　水　晴
旧知事公見招　以学寮試験忙不能到
（旧知事公に招かれた。しかし、兵学寮の試験が忙しく、伺うことができなかった。）
注
旧知事公　旧藩主・藩知事　淺野長勲　廃藩置県によって明治４年（1871）上京されていた。
廿五日　木　晴
朝上直
廿六日　金　晴
始学算以有所懲也　夜谷口生来　報官事将成
（学校が算数を始める。懲らしめるところがあるからだ。夜、谷口君が来る。仕事が成就しそうであると報告する。）
注
・算　計算　そろばん　算術　数学　・懲　こらしめる
廿七日　土　雪
詣粟津公
廿八日　日　晴
夜上直
三月一日　月　晴
以英学試験皇学教官無事午後一字退寮　過船越氏不在　過土井氏亦不在
（英語学の試験があるということで、皇学教官は執務がなく午後一時に兵学寮から引き下がった。船越氏のもとに立ち寄ったが不在。土井氏のもとにも立ち寄ったが、これまた不在。）
注
・船越氏　船越衛（まもる）天保十一年（1840）～大正二年（1913）広島藩士。幼名を八左衛門、のち洋之介（助）と改めた。明治維新後は衛と称した。また松操、松窓と号した。攘夷の論盛んになると山田養吉ら数人と共に相談のうえ脱藩し、事を起こそうとした。文久三年正月、執政辻将曹（維岳）が上京する機会に藩士数人と共に上京。元治元年第一次長州戦争では幕府と長州藩との調停斡旋のために働いた。明治元年戊辰戦争では参謀として参加。明治三年、陸軍大丞。明治七年陸軍省を退いた後は、戸籍権頭、内務権大丞に任命された。明治十三年には千葉県令、同二十一年には、元老院議官となり欧米視察。帰国後、明治二十三年石川県知事、翌二十四年には宮城県知事になった。勲一等旭日大綬章を授けられた。戊辰戦争に参加する時、京都で山田養吉先生に遇う機会があって、戦争への参加を促したが、先生は「待賓説」をつくり、自らの使命が人材育成にあると述べ、断った。
＊東京時代、先生は時に船越衛と会う機会があったものと察せられる。
二日　火　晴
三日　水　晴　雨　不定
雅之助入近藤氏之門
（雅之助が近藤氏の塾に入門する。）
注
・近藤氏之門　近藤氏　近藤真琴（1831～1886）
海軍省六等出仕　航海教授書調兼博覧会事務局員　号は芳鱗　通称　誠一郎　明治２年、麹町鳥羽藩邸内自宅で公務の余暇に業を授ける。11月、爲錯塾を攻玉塾と改称　７月より海軍兵学寮に出勤する。
参考
・山田養吉先生は、海軍兵学寮の教官に就任される前年の、明治６年に「日本志略」を編纂し、発刊されている。この序に以下のように記されている。（原文は漢文体、筆者が書き下し文に改め、注を施した。）
・日本志略序
「我が日本の尊厳，皇統の悠久、天地と與に無窮なる所以の者は、諸典籍を徴して（もとめて）、見るべきなり。但し其れ之を伝ふるは、或いは古言にして今人に便ならず、或いは支那の文にして邦人に通じ難し。故に之を修むるに、必ず歳年を積み、しかる後始めて其の言を通ずるを得ん。今や、五州の並びに文物興りて燦然たり。故に彼の書を読むを以て彼の所為を視んこと急務と為る。

然れども只彼の書を読みて、我の書を読まざるは、我が国体の何物たるかを弁えず。則ち猶ほ英仏露亜人のごとくにして、英仏露亜の国体を英仏露亜を弁えざるがごとし。五州の豪傑も亦将に人に笑はれんとするなり。然れば即ち如何ぞ。当に簡明にして読み易き者に就くべくして、之を講習するのみなるを。是れ海軍省兵学の寮此の書を撰する所以なり。芳隣近藤翁、初め省の中教授たり。海軍生を教ふるに好書無きを苦しむ。乃ち創意して此の書を造る。僅に第一巻を竣りて翁則ち澳州に航す。省乃ち余をして之を続成せしむ。余之を閲するを承り、国言の今人に通じ易き者を取り、以て之を書す。悠久厳雅なる国体自ら顕る。余意へらく、此の書成りのて後、海軍生徒、彼我併に内外を識り、真材実器（真の人材・まことの人物）と為らんと。亦庶幾すべき（願うべき）は、施すること市井里巷の児女、田野山谷の父老に至らんと。亦将に我が朝廷の尊きを知らんとするや、其の益政教に於いて鮮少（非常に少ないこと）ならず。善きかな、翁の之を創むる。之を省き、之を撰ぶ。抑も余草茅（民間）の陋儒（取るに足りない儒者）なり。才学固り浅く、識見固り卑くして、翁の筆を続ぎ、其の狗尾（立派な者の後煮つまらないものが続くたとえ）と為ること、論を竢たず。然れども惓々（まごころをつくす）の心、常に国体を忘れること能はず。今筆を執るを得て、此に関はること素より余の栄とする所にして、況や国言を以て国事を書する於いてをや。若し能はざるを以て之をことわれば、則ち将に国人爲るに愧づること有らんとすなるり。遂に辞せずして、筆を執り、其の所以を書して、之を巻首に置きて、云ふ、

紀元二千五百三十三年（明治６年：1873）第九月
廣島　山田養吉　撰」

四日　木　晴

渡六之介来　乞釐正田中正雄之小伝

注

・渡六之介　「芸藩志」（74巻）に「（慶応二年）十一月朔日洋学生徒五十名を江戸に留学せしむ。」とあり、その生徒の中に「渡六之介」の名前が見える。この生徒たちの「取締」が伴十郎兵衛（資健）・山田養吉であった。　・釐正　おさめ正す。文書・書物などを正しく修正して改めること。号とも考えられるが、子筍という号があるので、いかがか。

「釐」おさめる。すじみちをとおしてきちんととのえる。すじみちをただす。

・田中正雄　「血痕録」（広島志士　明治26年〈1893〉10月４日発行　著作者兼発行者　山田養吉）によれば、「姓は藤原氏、軍太郎と称す。安芸広島の藩士なり。天保十二年（1841）六月安芸国広島に生まれる。資性豪邁、（人より優れて偉い）幼年武術を好み、長ずるに及んで学に通じ、博く人に交わり信義を尽くす。常に曰く、男子宜しく竹筍の直上天を衝くが如くなるべしと。因りて自ら子筍と号す。（以下略）　以下の内容を簡略にいうと、勤王討幕の大義を主唱し、江戸において幕府の事情を探ろうとしているうち、幕吏に捕らえられ、幽因三ヶ月の後、毒せられて獄中で死す。慶応二年（1866）。「従容として、和歌を詠じて曰く、軽き身より重き義を取り国のため死ぬる命のなに惜しからむ」先生より八歳年少。

五日　金　陰

以天皇幸横須賀観卸帆学寮放業

（天皇がお出ましになり、横須賀で帆をおろすのをご覧になられるというので、兵学寮は休業）

○ 丁ヨホロヨハエルヨルノ心ホロハホロホロト同意賎シキ心讃岐金比羅ハ大国主ヲ祭リ崇徳天皇ヲ配ス淳和奨学両院ノ別当ハ久我中ノ院両家ノ職天子ノ師コレヲ徳川氏二命ズルハ徳川氏准后ヲ辞セシ故コノ職ヲ命ジテコレヲ師トスルナリ

欲購麓藻而詣数書林終不得購　訪粟津公質新約書之疑義

（修辞の巧みな詩文を購入したいと思い、数軒の書店を訪れたが、ついに購人できなかった。粟津公を訪ね、新約聖書の疑問点を質問した。）

注

・麓藻（れいも）　文章で、修辞がたくみなさま美しいりっぱな詩・文　・新約書　新約聖書

旧約聖書と新約聖書とがある。「約」は約束の意　キリスト生誕以前と以後とに分かれている。

六日　土　晴

朝上直

七日　日　晴
欲釣鴉而鴉善覚
(鴉を餌でおびき出そうとたが、鴉はそれをよく知っている。)
注
・釣　餌でおびき出す　・覚　さとる
八日　月　雨
紀清両党
＊意味がわからない
九日　火　晴
午前上直　暖炉破壊火殆焼屋
(午前、学寮に行く。暖炉が破壊し、火が殆ど家屋を焼く。)
十日　水　晴
聞谷口生拝命
(谷口さんが任官されたと聞く。)
十一日　木　晴
小早川鳳之介来　告止宿無処乞憐　乃為書致之谷口生乞三日之宿
(小早川鳳之介がやって来た。泊まると所がないと告げて、憐れみを乞う。そこで、谷口さんのところに手紙を届けて、三日ほどの宿を頼む。)
十二日　金　晴
松波氏疾　余獨直
十三日　土　晴
詣粟津公聴講義
○塩土　○塩ハシミ知ルー入ナドノ心ハ威稜モチノ釣リ
真諦俗諦(字書ニハ審もあり)　○諦ハ體(コノ字イブカシ)マタハ教ノ如シ　是法住法位
○法ハ法ノ位ニ住シテ法立ツサナクテハ立タヌナリ
夜谷口生来　賀其拝命供酒
(夜、谷口さんがやってくる。奉職を祝い、酒をもてなす。)
十四日　雨　日
訪橋本子拉人名字書草本帰
(橋本さんを訪ね、人名字書草本を持って帰る。)
注
・橋本　橋本雅邦　十一等出仕　図学教授
十五日　月　晴
午前獨直
十六日　火　雨
帰寓頗倦取五六杯　睡思忽生　大悔取杯
(寓居に帰り、すこぶる疲れていたので、五、六杯の酒を引っかけた。眠気がしてたちまち人生を思い、酒を飲んだことを大いに悔やんだ。)
注
・寓　かりずまい　寓居　・倦　つかれる　ぐったりする　・睡　ねむる　いねむりをする　・忽　たちまち　突然
十七日　水　風
黒田生来取渡六之介文稿
(黒田さんが渡六之介の原稿を持ってくる。)
十八日　木　晴
午前宿直
十九日　金　晴
雅之助与次郎疾至伊藤氏乞薬
(雅之助と与次郎が病気なので、伊藤氏のところへ行き、薬を出してもらう。)
注
・雅之助与次郎　どういう人物なのか分からない
廿日　土　雨
訪平本奇一　訪安達生不在　訪橋本生　夜田口生招余於万清　託昏事
(平本奇一を訪ねる。安達さんを訪ねたが、不在。橋本さんを訪ねる。夜、田口さんがわたしを万清に招待してくれ、結婚のことを託された。)
注
・安達　安達重典　大属　二等秘書営繕課
・田口　田口太郎(悳)　広島藩士田口牛之助の長男　天保12年(1841)4月27日生まれる。16歳にして藝藩の学問所句読師となり、後数年にして助教となる。学力速進超凡の評高し、(中略)文久年間尊王攘夷論起こるに当たり、藩情の不振を憤慨し、同志の士山田養吉、川合三十郎、船越洋之介、星野文平と共に、脱藩京師に上り、尽力せんと計画せしが、偶々藩の知る所となり、同三年藩命を以て執政辻将曹に伴はれて上京す、(中略)
元治元年七月長藩の兵京師に敗れ、七卿長州に走るや、藩より山田養吉と共に、山口に使いして、七卿及び長州侯を慰問せしむ。以下簡略に紹介する。長州戦争以後、江戸で開成校で洋書を学ぶ。明治元年帰藩。藩校洋学の教官となる。明治2年、

有志の学生、中村孟、村上敬次郎、西川虎之助を伴い、藩費で英国に留学する。明治６年帰国。明治７年紙幣寮権助に任じられ、その後20年に至るまで、太政官、海軍省、司法省、参事院等の諸官を歴任する。(「広島県人名事典芸備先哲伝」による）したがって、明治８年ごろは東京在住であり、先生との行き来があったものと思われる。(「芸藩志拾遺」)　・婚事　結婚のこと

廿一日　日　晴

朝上直

廿二日　月　雨

帰家　家人報昨藤井秀賢太田村雲川合鱗三平本奇一来

○黄熱香蘭奢待同物ニテ東大寺ノ宝ナリ　今伝フル伽羅

注

・川合鱗三　「藩校の助教であったが、文久三年山田養吉らと上京後は国事に奔走し、木原適所と謀り、賀茂郡志和村に神機隊を結成、戊辰戦争の際は参謀として仙台まで転戦した。廃藩後は内務省に奉職し、栃木県書記官にまで至った。彼が橋本（素助）と共に「芸藩志」編纂を委嘱されたの辞官後のことであったが明治三十三年五月、六三で東京で没した」。((「広島県史」近世資料篇Ⅰ)

廿三日　火　晴

廿四日　水　晴

昨帰途遇田口氏拉相場?帰今日終閲之

（昨日、帰途田口氏に遇う。かれの手元から相場篇を持って帰り、今日終にこれを閲す。)

注

・相場篇　よくは分からないが、二十九日のところに「為替篇」という言葉があるので、金融関係の書物かと思われる。田口氏は明治七年には、紙幣寮に勤めていたとあるので、金融関係の本を持っていたものと考えられる

廿五日　木　晴

以イーストルソンデー賜休暇　自昨日至三十日然　今日即当直　上寮

注

・イーストルソンデー　「イースターサンデー」の意か。　復活祭日曜日　兵学寮の休業規則に天長節、英生祭国女王誕辰、土曜日、日曜日、夏月休業、冬月休業、耶蘇更生が示されている。この耶蘇更生祭がキリストの復活祭のことである。「毎年四月中ニ有之一週日ノ休祭也」と定めてある。「四月中ニ」とあるが、復活祭はキリスト教暦では三月の下旬であることもあり、この明治八年の場合はそれに当たっているものと思われる。

廿六日　金　風

帰途欲質相庭篇而至田口氏遇寺尾平山二氏之在不質而帰　帰途購和約馬太伝　價銀三十三銭

（帰途、相場篇に関して質問したいと思い、田口氏のところへ行くと、すでに寺尾、平山の二人が来ているのに遇う。それで、質問をしないで帰る。帰り道、和訳のマタイ伝を購入する。値段が三十三銭。)

注

・馬太伝　新約聖書の中のマタイ伝　四福音書（マタイ、マルコ。ルカ、ヨハネ伝）の中の一つ

廿七日　土　晴

至粟津公聴講

廿八日　日　陰寒夜雨

朝至田口氏欲取相庭篇而主人不在　訪寺尾平山二氏　訪安托日本志　送国枝子　訪安達氏清水氏亦追至帰家　家人報宝田老之見過平本生来

○三分七五一分二五二朱十二五朱六二五三朱一八七五

（朝、田口氏の所に行き、相場篇を持ち帰りたいと思ったが、主人は不在であった。寺尾、平山さん二人を訪ねる。安［文字の脱落か？分からない］を訪ね「日本志」を国枝さんに依託する。安達氏を訪ねる。清水さんも亦追ってくる。家に帰ると、家人が宝田老が立ち寄られたことを報告する。平本さんが来る。)

注

・日本志　日本志略のことか

廿九日　月　風雨

麻生武平寄書　以松波子復病　請明日余代松波子直学寮　訪宝田老　訪田口子　不在　為替篇還

（麻生武平が手紙を寄こす。松波さんがまた病気なので、明日わたしが松波さんに代わって学寮の当直をして欲しいという内容であった。宝田老のもとを訪ねる。田口さんを訪ねる。不在。為替篇を返還する。)

三十日　火　陰夜雨
朝上直
三十一日　水　晴
退寮途上訪田口子　不在　帰途遇土井三上二氏帰家　平本生来
四月一日　木　晴
訪松波氏　臥病　帰途遇田口子
（松波さんを訪ねる。病気で臥していた。帰途、田口さんに遇う。）
二日　金　晴夜雨
午前上直
三日　土　晴　陰
退寮途上至大塚屋　命制履價銭二圓一歩一朱至粟津公聴講
○摂受　セッシュ　ウケイレル　　折伏　セップク　クジキフクサス
（兵学寮から帰る途中、大塚屋に行き、靴を作るよう注文する。値段は二圓一歩一朱。粟津公の所に行き、聴講する。）
四日　日　晴
蛭児　胡ト云ハ誤リ　ヒルミ子ニテヒルヒルスル
天安河　八リセ河　香山　天ニアリ夫レヲ取リテ　地ナルニ名ク
光宅　古文尚書ミチ居ルト大ニ居トモ読ム天下ヲ家ニスルノ謂ナリ
申食国政太夫　ケハ凡テ食物食国ノ事ヲ申シ政スル前ツ君
康功　尚書無逸安民功　田功　同　養民功
休暇心頗閑　訪牧某問山智之字　不能答　訪宝田翁質国史略　帰途購含英與麓の塵遂　訪田口子　不在
（休暇。心はいたってのどやかである。牧某を訪ね、「山智の字」について問う。しかし、答えることができなかった。宝田翁を訪ね、国史略について質問する。帰途、）
五日　月　陰
午前上直　田口子贈書　乞余過某店　答以明訪之
（午前、当直勤務。田口さんがわたしに某店に立ち寄るよう頼んだ手紙を送ってきた。明日そこを訪れると答える。）
六日　火　陰
朝雅之助来　兵学寮報昨夜見偸時辰表　午後直　還家不能　過田口氏
（朝、雅之助が来る。兵学寮が昨夜時刻表が盗まれたと報告する。午後当直。家に帰ることが出来ない。田口氏のところに立ち寄る。）
注
・見偸　「見」は受け身を示す　盗まれる
・時辰表　時刻表
七日　水　風
介小野氏買時辰表（価三円五十銭）過田口氏覚罹寒疾　乞酒
（小野氏を介して時刻表を買う。価は三円五十銭）田口氏のところに立ち寄り、風邪に罹(かか)ったように思われ、酒を所望する。）
八日　木　陰
午前上直
九日　金　雨
代饗　　大臣トナリシ時コレヲ口トカ
職曹司　　職事ノタマリ
東宮大進　大夫(カミ)ノ次カ
少志
過宝田氏質皇朝史略之疑義　○橋本生来
（宝田氏のところに立ち寄る。皇朝史略についての疑問点を質問する。橋本さんが来る。）
十日　陰　土
與北堂観開拓使公園　公園有三所甚宏
（母上と開拓使公園を観る。公園は三カ所あって大変広い。）
十一日　日　晴
早朝上直
十二日　月　陰
退寮帰途過田口氏欲話細君事件而不在　帰家田口氏却在焉
曲赦　一郡一村ノミヲ赦ス
（寮を退き、帰途田口氏ところに立ち寄り、細君の事件について話そうと思ったが、不在であった。家に帰ると、なんと田口氏がそこにいた。）
十三日　火　好晴
以石崎子足痛不上寮　余代直
（石崎さんが足痛のため寮に来られなかった。わたしが代わって当直をする。）
注

・石崎子　石崎安蔵　十三等出仕
十四日　水　好晴
例帰過宝田
天社　天ナル神ヲ祭ル　地　地ナル神祭ル
汝何辱我　我ガ意ニ随ザルヲイフ
埴輪　輪ノ如ク巡ラシマワス
非時　トキジクト濁ル
歴木　クヌギ　ドングルナリ
吾嬬巳矣（ワガツマヤハ）　ヤハヨ　ト同ジ
稲置　代官ノ如ク貢ナドノ世話スル稲ヲ置ノ義
古奚津（コケツ）
王仁ノ歌　冬籠リナルコノ花モサクヨ今ヲ春ベト
咲ヨコノ花サレバ君モ籠ラズシテ咲キ玉ヘノ意
払蟻　アブ
伊勢外宮　元ト御タビ所内外兮
黒戸　スベテ立派ニナキ所をイフ
（いつものように帰る。宝田氏のところに立ち寄る。）
十五日　木　雨
帰家傾五六杯　休眠頗快
（家に帰って五、六杯引っかける。休眠がたいへん快い。）
十六日　金　晴
午前上直
十七日　土　雨
退寮途上過大塚屋取履価銀二円三十一銭二厘五毛　午後過粟津氏聴講
（寮から退く。途中大塚屋に立ち寄り、靴を銀二円三十一銭二厘五毛で引き取る。）
注
・四月三日の記事を参照
十八日　日　晴
與萱堂観于墨陀上野飲於雁鍋
（母上と墨田・上野見物に行き、雁鍋で飲む。）
注
・萱堂（けんどう）　母のこと　（婦人の仕事部屋の前庭に萱草を植えたところから）母または、他人の母の尊称。北堂。　・墨陀　墨田のことか
十九日　月　晴
今日非直日而誤認以為直日午前上直
（今日当直の日ではないのに、誤認して当直の日と思い、午後当直に出かける。）
廿日　火　陰
今日則真直日　午前上寮　朝提燈師市兵衛来　話雁鍋　毎日輸入二百円　然負債亦至葱価千円
〇大谷生来　乞二円金
（今日がすなわち本当に当直の日である。午前、寮に出かける。朝、提灯師市兵衛がやって来た。雁鍋の話をする。毎日二百円分運び入れる。それで負債もまた葱の値が千円に達するという。大谷さんが来る。二円金を乞う。）
注
・輸入　①運びいれること。②外国から品物を買い入れること。
廿一日　水　晴　風
中尾水山中西三生来　飲而談　談頗飛騰
（中尾、水山、中西の三君が来る。飲んで話をする。話は大いに盛り上がった。）
注
・飛騰　とびあがること
廿二日　木　晴
閲輿地誌略疑問之処頗多
（地誌略をもちだして調べる。疑問点がたいへん多い。）
注
・閲　①けみする　みる　②しらべる　③いれる　あたってみてゆする　・輿　①人や物をのせてかついで運ぶのりもの　②かつぐ。のせる。かつぎ上げる。
廿三日　金　晴
夕過佐久間氏平賀子亦在飲
（夕べ佐久間氏が立ち寄る。平賀さんも亦来ていた。飲む。）
廿四日　土　晴　夜雷
直　木下子来　今日則意鞅々
（当直。木下さんが来る。今日は気分がはれない。）
注
・木下子　木下　乾　十四等出仕　英学　造船掛
・鞅々　楽しまないさま　不平なさま　不愉快そうなさま
廿五日　日　晴
夜遇宝田氏　原小崎二子見過而余不在　二子乃追至于宝田　宝田氏質田口之婚事有言
夜過田口子　不在　遂踪遇岡亀氏

（夜、宝田氏に遇う。原・小崎さん二人に立ち寄よられたが、わたしは不在であった。二人はそこでわたしを追い、宝田氏の所にやって来た。田口さんの結婚のことを質問する言葉があった。夜、田口さんのところへ立ち寄る。不在であった。足取りをたどって岡亀氏に遇う。）

平城之地　四禽叶園　四禽八青龍白虎朱雀

内覧　内八大内

注

・遂踪（すいそう）　足取りをたどる

廿七日　火　雨

読新聞紙知勝由利陸奥除元老院

（新聞を読む。知勝、由利、陸奥氏が元老院から退くとある。）

注

・除　のぞく　さる　官職を入れ替える

・元老院　明治初期の立法上の諮問機関。政府、大審院と並び三権分立を確立するため、明治八年（1875）太政官の左院を廃して設置。議長は左・右大臣。議官は華族・官僚などから勅任。権限は弱く、日本最初の官撰憲法草案を作成したが廃案。同二三年（1890）帝国議会の開設により廃止。

廿八日　水　晴

藤井秀堅来　為書紹介渡田口二子　借四円金

（藤井秀堅来る。手紙を書いて、渡、田口の二君を紹介する。四円金を借りる。）

廿九日　木　晴

過宝田氏不在　谷口大谷二氏来　飲

三十日　金　雨

韓櫃　韓ヨリ送リシ櫃ニ擬シタルモノ

訪宝田翁

五月一日　土曜　雨

朝上直

二日　日曜　晴

賜学寮生徒離宮縦観

（兵学寮の生徒が離宮を自由に見学してよいとのお言葉をいただいた。）

注

・離宮　浜離宮のことと思われる　浜離宮は東京都中央区浜離宮庭園にあった離宮。現在は浜離宮恩賜庭園。承応三年（1654）徳川家光次男甲府宰相松平綱重の甲府浜屋敷と呼ばれる下屋敷が造られた。綱重が六代家宣を称したため、西丸御屋敷、のち浜御殿と呼ばれ、明治以降、浜離宮となる。湖水池を中心とした回遊式臨海庭園。特別名勝、特別史跡。・縦観　思うままに見物すること

三日　月　晴

野口義盛持迪吉介書来

（野口義盛が迪吉介の手紙を持って来る。）

四日　火

詣宝田氏　遇国泰寺僧

新家（シンノミ）　神今食（シンコシキ）　神ニススメ御身モメシアガル祭ナリ

大夫　五位ナリ

開眼　仏ノ眼開カスノ心ニテ生クモノニスルノ心

内臣　文書ヲ内覧スルモノ藤原鎌足コレナリシ八極メテ貴トシソノ外左右大臣ノ下に居ル

五日　水　晴

田口生與子安子婚　応其招

（田口さんが子安さんと結婚する。その結婚式への招待に応じる。）

六日　木　晴

大森俊藏拉得一郎遊目黒　暮帰　大田村雲亦至

余酔罵村雲　大谷氏来

（大森俊蔵が得一郎を連れていって目黒で遊ぶ。夕暮れに帰る。自分は村雲を酒に酔った勢いでののしった。大谷氏が来る。）

注

・酔罵　酒に酔った勢いで人をののしること

七日　金　晴

與三輪子直学寮

注

・三輪子　三輪光五郎　少教授　幼年英学

八日　土　晴　驟雨　雷

與橘氏過粟津君　○昨津出作次郎来　余不在

今日亦来　飲

（橘氏と粟津君のところに立ち寄る。昨日津田作次郎が来る。今日亦来る。飲む。）

九日　日　晴

與花房子上直

十日　月　晴

野口義盛来　乞借四円金　使之就津田生而謀

（野口義盛来る。四円金を借りたいと言う。野口

くんに、津田さん従って相談するようにさせる。）
十一日　火　晴　直
朝野口生来　借四円金
（朝、野口さんが来る。四円金を貸す。）
注
・「借」とあるが、十日の記述では「乞借四円金」とあり、野口生が借りたいのだと思われ、その野口生が来たので、四円を貸したと解した。先生が借りたという箇所もあるが、ここは、先生が借りたというのではないだろう。
十二日　水　晴
到藤田氏還所借金
（藤田さんのところに行き、借りたところの金を返す。）
十三日　木　雨
直
十四日　金　晴
十五日　土　晴
與橘子上直
十六日　日　晴
朝帰家　家人昨報津田作次郎谷口瀧太郎来　〇拉萱堂與喜多遊神明至増上寺観薔薇　喫蕎麦
（朝、家に帰る。家の者が、昨日津田作次郎、谷口瀧太郎が来たことを告げる。〇母上を連れて喜多と神明に遊ぶ。増上寺に行き、薔薇を観る。蕎麦を食べる。）
注
・増上寺　東京都港区芝公園にある浄土宗の大本山。徳川家康の入府後徳川家康の菩提寺となり、慶長３年（1598）現在地に移った。以来、幕府の保護のもとに栄え、上野寛永寺と並ぶ大寺となった。
十七日　月　晴
與橘子上直
十八日　火　晴
十九日　水　晴
與石崎子上直
廿日　木　雨
黄昏谷口大谷二氏来　供酒
（夕暮れ時、谷口、大谷二氏が来る。酒をもてなす。）
廿一日　金　晴
以家君之忌辰　乞暇不上寮
（父上の命日。休暇を願い、兵学寮には出勤しない。）
注
・家君之忌辰　父上の命日　先生の父上は三太と言い、広島藩の歩行目付であった。（「山田十竹翁小伝」）慶応３年（1867）「家大人以閏四月十八日長逝」（「十竹軒日録」　自慶応戊辰八月朔）とある。
　太陽暦が採用になったのが明治５年12月３日、この日を明治６年１月１日とした。したがって、慶応３年閏４月18日は旧暦つまり、太陰太陽暦である。この命日を太陽暦にすれば、五月二十三日にあたるということである。
参考
「太陰太陽暦は、月の満ち欠けを主な基準にして決めた暦で、一か月を二九日または三〇日とし、一か年を一二か月、約三四五日と定め、更に地球の周期に合わせるため、五年に約二度の割で一年を一三か月とし、ある月を二度繰り返す閏月を設けた。」（「日本国語大辞典」による）
廿二日　土　晴
朝訪宝田氏
真如堂　京師
三明　インメヤウ杯
六通　天眼通ナド
御贖物（アミガモノ）
愛發（アハチ）
席田郡（ムシロ）
属星　ソノ年ニツキタル星
子ノ日　根ノ義松ノ出来ソメニヤク根ノヲ引キ
食ヒシガ始メ
天満大自在　ソノ徳天地ニ満ルノ義
高座山（クラ）
摂籙　籙ハシルシ　籙ノ物ナド同ジ　給禄ノ禄
モソノ功ニヨリテシルシテ賜ノ義ヤ
大閤　関白ノ隠居セシ　ラーート云禅閤ト云
ガモトニテ閤ヲ禅ルノ義ソレヨリーートモ云フ
夕時上直
廿三日　日　晴
今日正当家君忌辰　午後展祭　懐浪華之士恵也
（今日がまさしく父上の命日に当たる。午後、祭

儀にお参りする。浪華の士恵を懐かしく思う。)
注
・展　参詣する　・祭　祖霊などに奉仕して慰撫・鎮魂したり感謝・祈願するための儀式。祭祀。祭礼。
廿四日　月　雨
以英王誕辰賜暇　外国教師学寮生徒亦放業　朝上直
(英国王の誕生日につき休暇をいただく。外国教師の兵学寮生徒もまた休業。朝、当直をする。)
注
・英王誕辰　英国国王の誕生日　海軍寮の規定で休業日とされている。
廿五日　火　晴
野口生来　藤井生亦来　乞借金余亦窮不能借
(野口さんが来る。藤井さんもまた来る。借金を頼んできた。しかし、わたしもまた困窮していて、貸すことが出来ない。)
廿六日　水　晴
午前上直
廿七日　木　晴
廿八日　金　晴
午前上直
廿九日　土　晴
至粟津氏聴講
三十日　日　晴
補籬　津田作次郎偶来助之
(籬を補修する。たまたま津田作次郎がきて、手伝ってくれた。)
三一日　月　晴
午前上直
六月一日　火　晴
帰途過田口氏　安達生亦来　追至　蓋以昨夜有火問田口氏也　帰途過安達氏飲
〇帰家作次郎在焉　又飲
(帰途、田口氏の所に立ち寄る。安達さんもまたやって来た。後を追って来たのである。思うに、昨夜火事があったので、田口氏を問安したのである。帰途安達氏のところに寄って飲んだ。〇家に帰ると、なんと作次郎が来ているではないか。また飲んだ)
二日　水　晴
以士恵久無信　作與之之書　且作與脇景治謝近藤鋏返金之書
午前上直
(士恵から久しく音信がないので、士恵に送る書簡を書く。そしてまた、脇景治に送る、近藤鋏に返金したことを感謝する旨の書簡を書く。)
三日　木　午後雨
内竪　童殿上トテ冠セヌ者ヲ殿上ノ使役ニ供スソレガ転ジテ大臣関白ノ子供殿中見習ノ爲メニ殿上スルヲモーート云　サレド使役ノ分ガ本職ニテ後ニハ冠セシ内舎人ト混ゼシトソ
四日　金　朝陰　午晴
午後三時帰
五日　土　晴
八時上直
六日　日　晴
士恵書来　知其無恙　訪渡　訪船越　訪土井
(士恵の手紙が来た。彼が元気でいると知る。渡を訪ねる。船越を訪ねる。土井を訪ねる。)
注
無恙　つつがなし　元気でいる
七日　月　晴
天王閲彈撃於越中島　暮乃上直　作次郎来
(天子様が越中島において彈撃を検閲される。作次郎が来る。)
八日　火　晴
九日　水　雨　午後晴　熱
以石崎子病　急直　散歩市街遂至野村子
(石崎さんが病気なので急に当直をする。市街を散歩してついに野村さんの所にたどり着いた。)
十日　木　晴
作次郎復来　士恵書来
(作次郎がまた来る。士恵の手紙が来る。)
十一日　金　晴
十二日　土　晴
午前八時上直　士恵書来
十三日　日　陰
訪渡氏　話身事
(渡氏を訪ねる。一身上のことを話す。)
十四日　月　晴
訪宝田氏
八幡　応神帝崩　八ノ幡天ヨリ降ル　宇佐始メニ

テ八幡山ヘハ後に遷セシナリ
神木　神ノヨセ木　榊ノルイカ
午前上直
十五日　火　陰晴
学寮帰途訪松本半三郎　托三民会社方法書謄写之事　帰家余亦写其建白書
（兵学寮からの帰途、松本半三郎を訪ねる。三民会社方法書謄写のことを託す。家に帰り、わたしもまたその建白書を写す。）
十六日　水　晴
学寮帰途　過津田生旅寓　不在　帰　加藤老人在
注
・旅寓　　旅先で宿泊すること。また、その場所。旅宿。
十七日　木　雨
午前上直
十八日　金
十九日　土
朝上直　津田生訪余於学寮　話上言事件
注
・上言（じょうげん）　天子・天皇など、貴人に意見を申し上げる
廿日　日　晴
津田生来　〇訪服部生頗酔
注
・頗酔　すこぶる酔う　たいへん酔う
廿一日　月　晴
廿二日　火　雨
午前上直
廿三日　木雨
廿四日　木
廿五日　金
志恵上書添削了　将今日上寮上直　受士恵上書者栗本アツシ
（志恵の上書の添削が終了した。将に今日兵学寮に参上し、当直する。士恵の上書を受ける者は栗本アツシである。）
注
・上書（じょうしょ）　意見を述べるために主君・上官などに書状を奉ること。また、その書状。上疏（うえそ）。
廿六日　土
津田生来
廿七日　日
訪宝田　至清水返金　訪竹田氏　飲
廿八日　月　熱　甚
上直
廿九日　火　熱　甚
栗村氏老人来　得士恵書　造答書
三十日　水　雨
與加藤佐久間二氏会諸友於新橋
（加藤・佐久間二氏と新橋でいろいろな友だちと会う。）
七月一日　木
上直　検諸生之学業
（当直。諸生徒の学業を検査する。）
二日　金　陰
三日　土　陰
至粟津氏聴講

良香夜過羅城門	良香の夜羅城門を過ぐ
吟所作詩曰気霽	作るところの詩を吟ず日気霽（は）れ
風梳新柳髪氷消	風新柳の髪を梳（くしけず）る　氷消え
浪洗旧苔鬚	浪旧苔の鬚を洗ふ
楼上有嘆賞声	楼上嘆賞の声有り
又遊竹生島得三	又竹生島に遊び
千世界眼前尽之	三千世界を眼前に得　之を尽くす
句対未成島神賽	句対未だならず　島神賽（さい）して曰く
曰十二因縁心裏空	十二因縁心裏空（くう）なりと

＊十二因縁　仏語　無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死
これらはすべて前者があって後者があり、前者が消滅すれば後者も消滅するという、因果的な因果関係にあるとされる。人間或いは生物の生存を構成する要件として立てたもの。
千手観音二手ナル所ヲ千手二テ慈悲ヲ施スノ意
芋洗（いもあらい）　供御　飲食ノミ
公卿　三位以上　昇殿　五位ノ内ニモ昇殿スルトセザルトアルナリ
衛府　六衛ナドヲ総言スル也
津田作次郎所寓
上二番丁廿九番地　池内藤内　森本大八郎　同寓

四日　日　晴　夕驟雨
十六日　金　溽暑　甚
十七日　土　口
至粟津氏聴講　新寮生某某亦至　〇有以明十八日午前十時詣海軍省之命
（粟津氏のところに行き、講義を聴く。新寮生誰それもまたやって来た。明十八日午前十時、海軍省に参上せよとの命令がある。）
十八日　日　晴
拝命補海軍省十一等出仕　直
（海軍省十一等出仕に補せられるを拝命する。）
十九日　月　晴
廿日　火　晴
廿一日　水　晴
廿二日　木　晴
廿三日　金　晴
廿四日　土　晴
廿五日　日　晴
廿六日　月　晴
廿七日　火　晴
廿八日　水　晴
廿九日　木　晴
橘子見訪恵宿布
三十日　金　晴
上直
三十一日　土　大驟雨
至粟津氏講経
（粟津氏のところに行く。経を講義する。）
八月一日　日
以室狭熱甚営二室　至原田氏返三円金　見固辞
（部屋が狭く熱気が甚だしいので、二つの部屋を使う。原田氏の所に行き、三円金を返す。しかし、固辞された。）
二日　月　陰
今夏熱甚　寒暖計有往々九十余度者而三十一日驟雨以後暑頓減
（この夏熱暑がはなはだしい。寒暖計がしばしば華氏90余度を示したが、三十一日、驟雨以後暑さがとみに減じてきた。）
注
・90余度　これは華氏による目盛り。華氏90度は摂氏32.22度に当たる。

三日　火　陰
四日　水　雨
五日　木
直
六日　金
至船越
七日　土
八日　日　雨
加藤氏合婚　余会之
（加藤氏が姻戚関係を結んだ。わたしはこれに立ち会った。）
注
・合婚　姻戚関係を結ぶ
九日　月
十日　火
十一日　水
上直
十二日　木
十三日　金
十四日　土
十五日　日
直
十六日　月
十七日　火
十八日　水
十九日　木
廿日　金
上直
廿一日　土
詣粟津氏講聖書
〇観音　慈悲智慧兼有ノ佛
コレヤコノユクモカヘルモワカレテハ知ルモ知ラヌモ逢坂ノ関
　コノ　ハ　カノ　ノ意　テハ　ノ　ハ
　ハ　ー　ニ　ツツ　ニ　作ル
廿二日　日
廿三日　月
藤井秀雄拉秀堅而来
餓鬼道　吝嗇ノ鬼
（藤井秀雄が秀雄を引き連れて来る。）
廿七日
児次郎病且有暗誦事類之事　此間一月脱記録

（わが子次郎が病気になり、そのうえ暗誦事類のことがあって、この間一箇月記録が脱落している。）
注
・次郎　二郎。長男得一郎が亡くなったあと、家を継いだ。
九月二日
津田作次郎来寓
四日
碓井京之介帰国
十月一日
滝口　太子帝帯刀天子滝口
大蔵経　一切経
外史諸　遠未勘損州之公文　外史掌各州公文
思ひ出や無キ名立ソ身ハ憂カリ口口現人神
サザナミヤ志賀ノ都ハアレニシヲ昔長柄ノ山桜カナ
御裳濯川　大和姫ノ故事
食渡（くひのわたり）
廿五日
児得一ヲ括斎ニ托シ帰県セシム　小泉牛之助来ル　夜佐久間子ヲ問
（わが子得一を括斎に託して広島県に帰らせた。小泉牛之助が来る。夜、佐久間さんを訪問する。）
注
・得一　得一郎のこと
廿六日　雨
上直
廿七日　晴　水
兵学寮帰途過安達氏　議暗誦双六之事
（兵学寮の帰途、安達氏の所に立ち寄る。暗誦双六のことを協議する。）
注
・暗誦双六　「暗誦事類」が双六をして遊べるようになっている。楽しんで勉強できるように格別の配慮がされているので、「暗誦双六」と言っているのであろう。二十九日のところを参照。
廿八日　陰　木
上直
廿九日　晴　金
上寮　午後欲議暗誦事類之事與橘生　訪土佐好於浅草山内　帰途過文会舎與足立子　再至浅草三内
（兵学寮に出勤。午後、暗誦事類のことを橘さんと協議したい。土佐好を浅草山内に訪ねる。帰途、足立氏と文会舎に立ち寄る。再び、浅草山内に行く。）
注
・「暗誦事類」わが国の歴史、地理に関することで、ぜひ生徒が暗記していなければならないことを小冊子に編輯して、携帯に便ならしめたもの。普通の文章により、各頁の欄外に設問を置き、その設問は、一から九十まであるが、設問に答えられたら一から順次進んで九十で上がりとなるように、双六をして遊べるようになっている。楽しんで勉強できるように格別の配慮がされている（刊記は、明治８年11月刊。
三十日　土　晴　暮陰
三十一日　日　晴
朝上直
十一月一日　月　晴
詣浅草　帰途遇安達氏
二日　火　晴
午前上直
三日　水　陰
以天長節学寮放業　終日酔眠
（天長節なので兵学寮は休業。終日、酔眠する。）
注
・天長節　明治天皇の誕生日
四日　木　晴
学寮帰途又詣浅草
五日　金　晴
上直
六日　土　晴
応松波氏之招　花房石崎二子亦至
（松波氏の招きに応じて、花房、石崎さん二人もまた行く。）
七日　日　晴
土佐好報双六画成　直至安達氏
（土佐好、双六画が完成したと知らせてくれた。直ちに安達氏のところにいく。）
注
・双六画　「暗誦事類」が双六をして遊びながら楽しみながら暗誦できるように工夫されている。その双六の画のことと思われる。
十二日　上直

十三日　晴　土
午後至安達氏　至土井氏　至河合氏
十四日　日　陰
雅之助将応陸軍省之試　終日観其　読八家文
（雅之助、いよいよ陸軍省の試験に応募しようとしている。終日それを観る。八家伝を読む。）
注
・八家文　唐宗八家文読本。中国の総集。30巻。清の沈徳潜撰。乾隆４年（1739）成立。唐宗の八大家の模範となる文集を集め、評点・段階を付したもの。明の茅坤（ぼうこん）の「唐宗十大家集録（「唐宗十家文」とも）51巻に基づく選本。日本には江戸中期以後に伝来。文化11年（1814）昌平黌で官板に付されてから教科書として流布した。
十五日　月　晴
上直
十六日　火　晴
帰途過文会舎
十七日　水
十八日　木
十九日　金
二十日　土　晴
二十一日　日　晴
加藤佐久間二子来　転到数家酔忘　爾後節酒
（加藤・佐久間の両君がやって来る。数件の店に行き、酒に酔うてみんな忘れてしまった。これ以後、酒を節制しよう。）
二十二日　月　晴
二十三日　火　晴
夜上直
二十四日　水　晴
詣神明社前津国屋　命造洋服　買禮帽　帰家栗村氏媼来　贈酒
（神明社前の津国屋に行き、洋服を仕立てるように注文する。式帽を購入する。家に帰ると栗村氏のおばあさんが来ていた。酒を贈る。）
二十五日　木　晴初霜
帰途詣文会舎　詣安達氏暗誦事類搨刷将告成
（帰途、文会舎に行く。そして安達氏のもとに行き、暗誦字類の印刷がいよいよ出来上がろうとしていると告げる。）
注
・搨刷（とうさつ）　印刷
二十六日　金　晴
午前上直
二十七日　土　晴
至三井替金　帰途過文会舎　又過安達氏　午後詣粟津氏講ヲ聴
・三井銀行のことか　・替金　換金する
二十八日　日　晴
日午散歩至山内外　東京府有明午前九時徵余之檄
（正午、散歩して山内外に至る。東京府明日午前９時わたしの檄文を徵集する。）
注
・日午（にちご）　午の刻　正午　・檄文　一般大衆に自分の主張や考えを強く訴える文章
二十九日　月　晴
詣東京府　府與以版権免状　○上直
（東京府に行く。府、版権免状を与える。）
三十日　火　雨
学寮帰途遇安達氏
十二月一日　水
二日　木
過文会舎
三日

	麻布第一聯隊
越前	淺野亀蔵
	麻布第一聯隊
石川県	林　続
	同
同	中村左内
	同
新潟	山本政元
広島	酒井一太郎

＊日記中に網掛けをした箇所がいくつか記されているが、どういう意図なのかよく分からない。
参考
■粟津高明（1838～1880）　明治時代前期キリスト者。桂二郎とも称す。天保９年（1838）４月29日、膳所藩士の子に生まれる。明治元年（1868）横浜にて宣教師バラより受洗。同５年（1873）日本基督公会（横浜公会）設立に参加。同６年（1873）９月小川義綏ら東京在住会員とはかり築地に東京公会（のちに教栄教会）を組織。９年（1876）

公会への外国伝道局からの支配が強化されることに反発。外国宣教師の干渉をきらって退会。東京麻布の自宅に新しく日本教会創立。ここで毎晩ごとにみずから説教するとともに、洗礼・聖餐式を司り無教会独立をつらぬいた。かれは明治２年（1869）に大蔵省出仕。ついで海軍兵学寮・兵学校で英語を教授するかたわら、７年（1874）ごろより、日曜日に幼年生徒へキリスト教を講義しており、独立伝道者としての生涯を13年（1880）10月29日にとじた。43歳。葬儀は遺言にもとづき、神道の式で挙行され、東京赤坂の青山墓苑に葬られた。日本教会は粟津死後、門人和田秀豊が指導、15年（1882）小崎弘道の新桜田教会と合併、東京第一基督教会（のちの霊南坂教会）となる。（「日本近現代人名辞典」　吉川弘文館）

■「日本史略」（地理、神代、人皇・歴代天皇の和文の歴史。兵学寮の史学の教科書として。序に海軍卿の勝安房。養吉序には、『悠遠厳雅、国体自顕、余意此書成後、海軍生徒、識彼我、併内外、爲真材実器、亦可庶幾、施至市井里巷之男女、田野山谷之父老、亦將知我朝廷之尊也、其益於政教、不鮮少矣』と在る。刊記は、明治６年８月　海軍兵学寮とある。

■「花井卓蔵私は九歳にして山田十竹先生に学ぶ」
　法学博士　花井卓蔵

私が亀岡勝知君の紹介に依って初めて山田十竹先生の塾へ参ったのは明治十三年八月と記憶して居る。年齢九歳何ヶ月であった当時塾は今の麻布の俄善坊町慥か十三番地（其頃は我善坊谷と称す）で、神谷町の角に厳養寺と云う大きな寺があった。へ這入ると左が藪、右が墓地で、その先に山田先生の所謂十竹居と称した家があった。・・・山田先生の塾では、日曜になると、講義を聴くのに二組に分れた、其一つは海軍兵学校の生徒の山之内一次君等の洋学派今一つは駒場農学校の勝島仙之助君等の漢学で、塾迄相当道が遠く、今日の如く宣伝も広告もしないのに生徒が多く集まったのは全く山田先生の人格、学識と云うものが其頃既に世間から認められて居ったと云ふ証拠である思ふ。然るにも拘わらず自らの地位の低き事、受くる俸禄の薄いと云事は少しも念頭に置かれず、何の不平も言われなかった事は全く遠藤君の述べられた通りである。それから明治十七年か明治十八年がったかに、修道黌の秀才を率ゐて東京に来られた。其時収容せられた所が四ノ橋の西行寺と云ふ寺である。其処は要するに広島の修道黌の延長と云へる、其時我善坊町の塾時代の遠藤君の立場に居たのが長尾司馬人君で、私は貧乏で苦学して居た途中であったが、其頃先生は宿へ来いと言はれたので、山城町の宿へ行くと、そんなに困るならば修道黌の貸費生にしてやらうと云ふことでそれから一年間其恩恵に浴することゝなったが、其因縁は山田先生にある、是が先生の先生たる所以であると思ふ。要するに私は先生に属する前後二三年に過ぎないけれども深く其恩に感激し未だ嘗忘れることがない。命日には霊を祀って感謝して居るやうな訳である。（「芸備之友」第25巻第237号）

参考書

・海軍兵学校沿革（海軍兵学校篇　復刻原本大正八年刊　原書房）　・近藤真琴先生伝（財団法人　攻玉社篇）　・日本近現代人名事典（吉川弘文館）　・芸備の友（第二十五巻　第二百三十七号）　・三百藩家臣人名辞典（新人物往来社）　・血痕録（広島志士　山田養吉）　・山田十竹翁小伝（水山烈）　・広島県史　近世資料篇Ⅰ　芸藩志拾遺　・日本の歴史（中央公論）　日本国語大辞典（小学館）　・広漢和辞典（大修館）　・漢字源（学研）

特別寄稿

修寿会開催報告

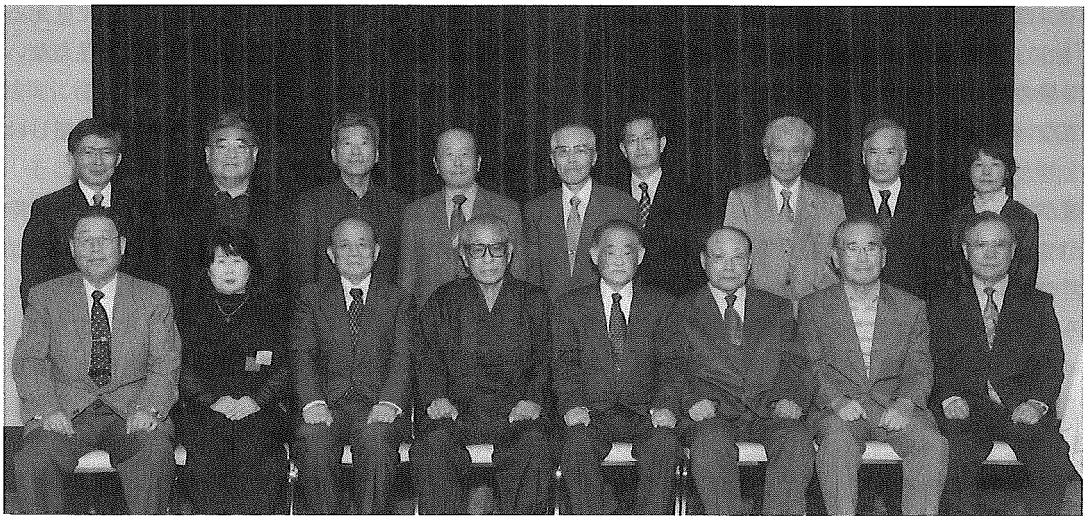
修寿会幹事　木　村　正　勝（元事務長・高13回）

修道中学・高等学校の退職教職員の集まりである「修寿会」（会長・河野富士雄、会員84名）の第23回総会・懇親会が平成21年10月10日(土)、鯉城会館（広島県民文化センター内）で開かれ、17名の参加がありました。

懇親会では、今ほど恵まれていない敗戦後間もない時代からの思い出として、先生方の一人何役もの働きをされてのご苦労ばなしや、遅まきながらも、その頃からの修道関係の写真を収集しておく必要があるのではないかとのご提言、また、高齢をマイナスと思わないで長寿を考え、受け身でない人生を生きたい、あるいはご興味、関心のある事柄についてのご意見の開陳など、和やかなひとときを過ごしました。一方、相次いで他界された先生方を偲んでの想い出も尽きませんでした。

今年の新会員は、壱岐俊平さん、寺山美穂子さん、北川建次さんで在任中のこと、これからの抱負など、入会の挨拶がありました。

そして、恒例の校歌を斉唱し、次回（平成22年10月9日《第2土曜日》）再会を期し、修道学園のますますの充実・発展と会員の健勝を祈念して万歳三唱し、お開きとなりました。



木村　北川　原本　竹永　有田　畠　藤澤　金子　中山　河野　壱岐　吉崎　保沢　向井　田中(正)　寺山　街道

特別寄稿

香川龍介君の個展に出席して

（体当りしている）

林　　孝治（高２回）

芸術の秋、20年に続き21年も10月29日より11月３日（火）文化の日まで金座街の「スズカワ画廊」にて作品の展示が行われました。

案内状をいただき下村君の、お誘いもあり10月31日（土）15時の約束で現地にて、お逢いしました。彼の絵は題名もなく抽象絵で僕たち二人のスポーツマンに説明なしでは理解し難いものです。そこで、絵の話題よりも、在学当時の同級生の消息のことになりがちであります。

途中で、彼が突然話題をかえて、「絵もスポーツと同じことだ」と語りだしました。

「一つは、自分から「絵を」支配するのではなく、自分が「絵に」支配されるのだ」

「二つ目は、自分が「絵を」描くのではなく、「絵に」描かされるのだ。絵が自分を描いている。対象の花に絵を描かされているのだ。自然には勝てない」

「大自然が偉大であること」は承知しているが、彼がスポーツをどのように捕らえているのか。彼がサッカーをどのように考えているのか。彼の発言の言葉の「絵」と「サッカー」を置き換えて読み返してみる。共通点をみいださなければならない。

我々は大自然を共有し、大自然と共生して、「生きている」のではなく「生かされている」ことは理解している。

サッカーの場合、受動的に考えて、「我軍のことのみを観るのでなく」、「敵軍を詳しく観よ」、対戦相手の訓練・練習・試合運びを技術面だけでなく、目に見えないものを観よ。肉体的なものだけでなく、精神的な内面的なものまでも深く探求せよ。

敵軍の動きを観て、我軍の動きを。敵軍の攻撃を観て、我軍の攻撃を実現せよ。

そのように全体をみれば、なにかの瞬間に偉大な不思議な大自然の力がはたらく。（サムシング・グレイト、目に見えない不思議な力）

このようなことを考えてみました。このような理解でよいのでしょうか。

大自然は偉大な力をもっている。決まった秩序（ルール）をもっている。狂いなく存在している。秩序に支配されないと生きていけない。それは大自然に反抗することになるからだ。

大自然に勝つことはできない。大自然を支配することはできないから、自分で自分を支配して、他の人に観てもらう。そして、大自然とのかかわり方、自分の生き方を観てもらうために始点に戻って考え直すことではないでしょうか。

画面の外まで「読む」。読めぬものを、見えぬものを「観える」ようにする。人の目で見えないものを認識することである。

精神的に肉体的に強靭な生き方をして、新しい感動を得られるものにしなければならない。

今の仕事を対象にして、自分のもっている純枠な精神が行動となり、新たな自分との出会いとなり、創造を生み出すことが自分の「生きがい」となる。

仕事が自分を捕らえた、自分の方から仕事を捜し求めた。自分と仕事が一体になった。

人の心の根底を（魂を）揺さぶるものを創造して、次の世代に引き継いで多くの人々の「生きる力」になって欲しいものである。

「サッカーが好き」サッカーを始めた。なぜ好きになったのだろうか。「非常に苦しい」苦しい中に、苦しさが大きければ、大きいほどゴールをゲットすると、喜びも大きい。

ここに、「やりがい」がある。大きな目標がある。サッカーの目的はゴールのゲットである。

人生でいえば「生きがい」がある。生きる目的がないと「生きがい」がない。

諸先輩はサッカーを創り、ルールを創り、我々はこれを真似をし、学んできた。

大自然に秩序があるのと同様にサッカーにはルールがある。このルールが大自然の法則と言うべきか、すばらしく、よくできていると思います。「生きる」ルールと同じだ。

1．決められた枠内でプレイをする。
2．決められた時間内に勝負をする。
3．反則をしたら罰がある。(レッド・カード、イエロー・カード)
4．良いことをしたら褒められる。(グリーン・カード)
5．降雨でも試合を続行する。(雨の日でも生きていく)
6．雷の時は中止する。(命は大切にする)
7．手を使わない。(頭と体を使う)
8．待ち伏せをしない。オフサイド(卑怯なことは禁止ずる)
9．チームプレイである。(全体の総合力を発揮する)
10．フェアプレイ(相手を思いやる)

当然かもしれませんが、この当然が、大自然の法則に従っていることが、香川君の言いたいことかもしれません。

そこで、香川君に訊いて見た。『君の絵と僕達のサッカーは同じだ』と言うことは何を言いたかったのか。

香川君の言葉

スポーツ・絵画・文学・音楽など、かかわるものが違うだけで、行き着くところは、みな同じだと思う。

「わしがわしがと思っている間は、私でないぞ」我が師、坂本善三先生の言葉。

絵を描くなかでいろいろな体験(探す姿勢)をとおして、自己否定をすることが絵を描く本当の出発点であることを知る。

自己否定することによって、大自然の不思議な力と出会い、その不思議な力に支えられて絵を描く楽しさを知る。

楽しく描くことができるのは、からだ全体でキャンバス全体と体当(スポーツと同じ)しているからであろう。

絵を自分が描くという意識は、絵を自分より下に置き絵の支配者となり、自分よりすばらしい絵を描くことは出来ない。

絵(自然の不思議な力)の支配下になり、不思議な力の声にしたがって描くことが描き手を最も豊かにするであろう。

香川君は以上のように解説してくれました。

楽しく絵を描く。楽しくサッカーをする。感動をする。より良い作品の完成を祈る。試合に勝つことを祈る。そして、笑い、感動し、喜ぶ。そのことで、プラス思考になると思います。

大自然に感謝し、大自然と共に生きる。生まれてきたことを喜び、命は自分だけの命ではない、生かされていることに感謝し、自分の素晴らしさを自覚し、多くの人々のために世の中のために活動する。

そのような思いで生きていけば、すべてが良い方向にむかい、諦めず、努力し続ければ、必ず、限りない可能性を引き出させてくれると思います。

絵画とサッカーの共通する部分は香川君の「体当たりしている」のは「全身全霊をかけている」ことではないでしょうか。サッカーのゴールをゲットする場面を考えてみる。これには千差万別である。ゴールのゲットに決まったはっきりした型はない。誰が、どんな形でいれても入れば一点である。足で蹴るのも、頭にあてても、体で押し込むのも、一点。しかし、その動作をおこすために、「創造する」ことが必要、どんな姿勢からでも、どんな角度からでも、足・頭・体(手以外)を使って、送られてきたパスのボールをダイレクトで処理するか、一度、止めて処理するか、ゴールキーパーの位置も考慮にいれ、コースを見極め、「瞬間の判断」でシュート・ボールを放つ。相手チームはこれを「創造して」、守りにくる。シュートしなければ何も生まれない。

「全身全霊をかけて」「創造する」「実現する」ことに共通することがあると思います。

「創造する」ために絵もサッカーも共通点を見出せば、香川君は「からだ全体でキャンバス全体に体当たり(スポーツと同じ)している。と言っている。

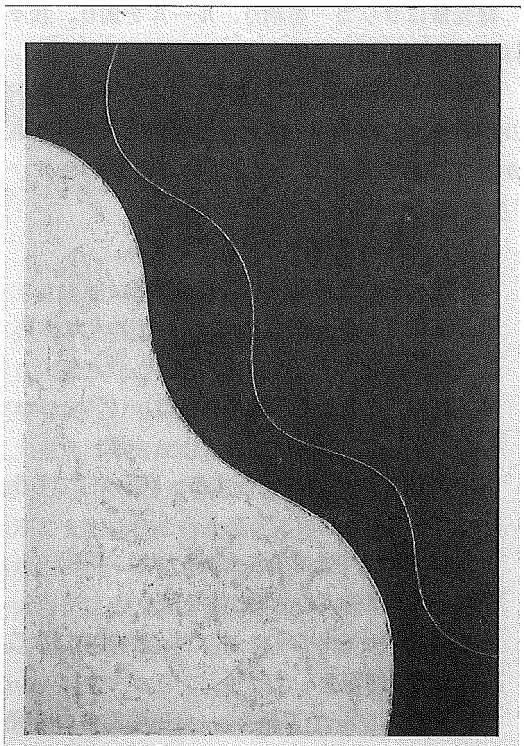
「体当たりしている」とは、どちらも、より高いハードルを目途に「全身全霊」をかけて「体当たり」をして挑戦する。独自の発想で「創造した」ことを行動・動作にあらわし、実現することであると理解してよいのでしょう。

「一枚の絵を完成する」「一本のシュートを打つ」ことで変化が生まれ、行動に移したことで何か次の発見ができる。何か行動をおこさないと、何も生まれてこない。

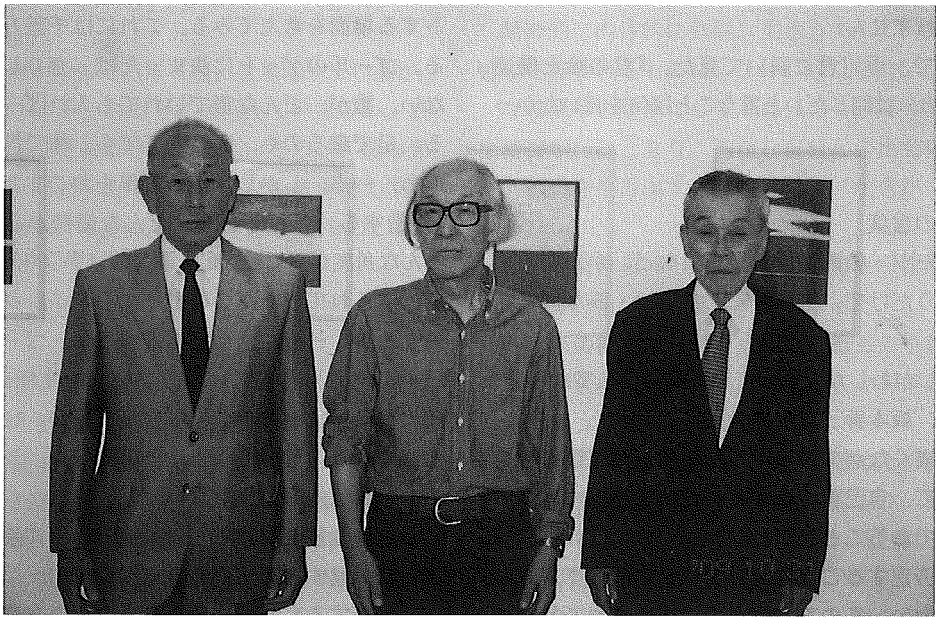
考えてばかりでは可能性が狭くなる。「思うのは」、どのようにでも思えます。「考えるのは」、どのようにでも考えられる。

大切なことは「全身全霊をかけて」{創造} をして、{行動に移す} こと、「行なう」ことではないでしょうか。

以　上



香川龍介「作品 09-009」 15M 油彩・ｷｬﾝﾊﾞｽ



写真は左より　下村幸男、香川龍介、林　孝治（敬称略）

特　別　寄　稿

ねんりんピックに出場して

(生涯サッカーの現役として)

林　　孝　治(高２回)

第22回全国健康福祉祭北海道・札幌大会2009は平成21年９月５日(土)より８日(火)札幌を中心に道内の各地に別れて、開催されました。寒さを避けて９月４日(金)に広島空港を離陸し、新千歳空港に着陸しました。

「ねんりんに、夢を・大志を・青春を」テーマに総合開会式は札幌ドームで常陸宮殿下・同妃殿下を、お迎えして、盛大に行なわれました。今回は特に、広島の郷土愛を前面に出し「広島市選手団」を「北広島市」の高台小学校５年１組の児童達が、大歓迎をしてくれました。今までにない郷土の「ぬくもりある感動」と「元気を」、いただきました。

その翌日より、サッカーは札幌ドームとサッカーアミュズメントパーク／東雁来公園に分かれ、全国の都道府県・政令都市から出場した56のチームをＡからＮの14ブロックに分かれてボールを追いかけ、「金メダル」をおいかけました。

修道から今年は千葉県から竹内民雄・全国優勝を２回達成した時の主将若山待久、広島県代表選手として、脇　洋一・大内　晟、広島市代表選手として、林　孝治・高瀬正則・藪　正梧の７名が出場しました。(敬称　略)

第23回大会は（平成22年に）石川県が主催することに、決定しております。

「光る汗、輝くいしかわ、笑顔の輪」をテーマに実施されます。

戦績は下記の通りです。千葉県と広島市は金メ

Ｃブロック

	千葉県	熊本県	広島県	名古屋市	得点	得失点差	順位
千葉県		３－１	４－１	４－０	１１	９	１
熊本県	１－３		０－１	３－２	４	－２	２
広島県	１―４	１―０		０―２	２	－４	４
名古屋市	０－４	２－３	２－０		４	－３	３

Ｊブロック

	石川県	徳島県	宮城県	廣島市	得点	得失点	順位
石川県		１－０	１－１	０－２	２	－１	３
徳島県	０－１		１－４	０－５	１	－９	４
宮城県	１－１	４－１		０－２	５	１	２
広島市	２－０	５－０	２－０		９	９	１

	東京都口	廣島市	富山県	大阪市	得点	得失点	順位
東京都口		０－２	３－０	０－０	３	１	３
広島市	２－０		４－０	１－１	７	６	１
富山県	０－３	０－４		０－２	０	－９	４
大阪市	０－０	１－１	２－０		５	２	２

ダル、広島県は何故か、ドオにもならない（銅メダルにもならない）お土産のない結果となりました。

これからも全国各地で活躍している「修道ＢＯＹ」が年齢に関係なく、サッカーを生涯スポーツとして、楽しみ、交流を深め元気に生きていただきたいものです。

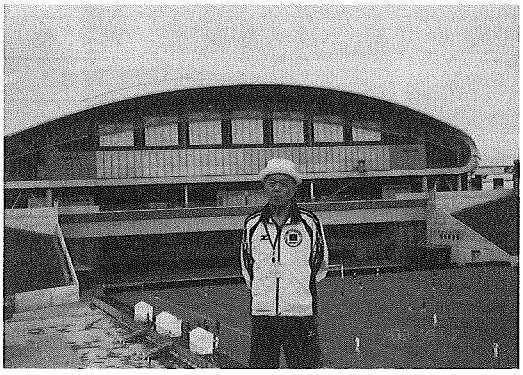
平成22年のねんりんピックは石川県で「光る汗、輝くいしかわ、笑顔の輪」をテーマに10月９日(土)より12日(火)まで開催することが決定しております。今から準備をして過去のサッカーの名門校を思いおこしていただくと共に「文武両道」の学校にするよう皆で協力して実現しようではありませんか。

全国の各地より多くの「修道ＢＯＹ」の出場を、お待ちしております。この大会は23回目にあたり、なんとか、軌道に乗り、列車が走るようになりました。高齢者社会を迎え、次は80歳以上のゲームができるように準備をしております。

以　上

写真は左から
大内　晟（アキラ）（高11回）
竹内民雄（高10回）
脇　洋一（高15回）
若山待久（高14回）

藪　正悟（高17回）
林　孝治（高２回）



高瀬正則（高９回）
後方は札幌ドーム球場

人物往来

味方の損害、戦艦1

故景山　崇人氏（旧中33回）

主砲発令所。死に場所と思った

終戦の年に旧海軍兵学校を卒業した元タカキベーカリー社長の景山崇人さんの配属先は、戦艦大和だった。乗艦したのは沖縄特攻に出撃する3日前である。

戦艦大和での配置は主砲発令所で、分厚い甲板の下に部屋があった。主砲を撃つときの距離や角度、風向、風速などのデータを入力し、砲塔に送り出す。そこが死に場所だと思いました。

大和は10階建ての巨大なビルのようで、主砲発令所は甲板を下りて左右どっちにあるのか分からない。まるで迷路のようでした。指導教官の一人が第一士官次室（ガンルーム）の室長だった臼渕磐・大尉（当時21）。スマートな人柄で、動作がきびきびしていた。

艦内の配属場所を覚えるのに精いっぱいだった1945（昭和20）年4月5日夕のことです。私たち少尉候補生は、駆逐艦が大和に給油する作業を甲板から見学していた。突然、艦内スピーカーが「候補生総員退艦用意」を告げた。候補生の代表がすぐに艦長に談判しに行ったが、だめだった。その夜、ガンルームで皆で酒を飲んだ。当時のことを、少尉で大和に乗艦して生還した吉田満さん（79年死去）が戦後、「戦艦大和ノ最期」で沖縄特攻をめぐる士官同士が激論を交わしたと書いているが、覚えがない。つかみ合いになったような記憶はないです。

少し話はそれますが、70年代初めごろだったと思うが、日銀に勤めていた吉田さんを広島に招いて経済の話を聞く機会があった。大和に乗艦していたと私は名乗り出たが、吉田さんの反応は打てば響くという感じではなかった。この人は苦しんでいる、話をしたくないんだ、と思いました。部下がたくさん死んでますから。

話を大和に戻します。候補生は4月6日未明に退艦しました。大和は同日夕に山口・徳山沖を出港。私たちは呉港に戻り、航空母艦の葛城に集まった。その翌日か翌々日だったと思います。内火艇（艦艇搭載の小艇）の指揮官として呉港の川原石に上陸員を迎えにいったら、桟橋からラジオ放送が聞こえた。「沖縄海上特別攻撃隊、戦果発表」と。第二艦隊はええぐあいに沖縄に着いたのかなと思ったら、「味方の損害、戦艦1」と伝えた。沖縄特攻で出撃した戦艦は大和しかいない。沈んだことを知った。人間の運は分からんもんです。

その後、葛城から軍艦大淀に移り、45年6月から大竹の潜水学校に行くことになった。そこで基本的な操艦訓練を受けました。3ヵ月ぐらいで潜水艦に配置されるが、そのころ残っていた艦はもう少なかった。実戦に使えるのは（特攻兵器の人間魚雷）回天か小型潜水艇ぐらい。海軍兵学校時代、回天に乗るのは怖いと思ったけれど、大和に乗艦した時点でそれは消えました。覚悟が決まりました。

広島に原爆が投下される2日前です。私は一晩、広島市・竹屋町の実家に帰った。両親と妹2人が暮らしていた。翌朝に大竹に戻るとき、妹たちには「元気でやりなさい」と声をかけた。それが家族の顔を見た最後になりました。

（2009.9.10朝日新聞）

被爆体験が信仰の原点

四竈　　揚氏（高校2回）

あの惨状伝える責任

広島市出身で、日本キリスト教団東京教区の四竈　揚牧師（77）＝東京都世田谷区＝は、旧制中学時代の被爆体験が信仰の原点だという。同学年の友人との、紙一重のような生死の分かれ目。弟たちを気遣う手紙を残して16歳で死んだ姉。同市内であった講演会で「あの惨状の一端でも伝えることが、クリスチャンとしての自分の責任」と語った。（串信考）

講演会は、東区山根町の広島東部教会が設立100年を記念して開催。四竈牧師は「平和と生命の尊さ－被爆体験を貫いて」と題して話した。

生死の分かれ目

修道中２年だった1945年８月６日、市役所の周囲に防火帯を造るため、家屋撤去後の片付け作業に動員されていた。同学年の「小方君」が、「学校に残っている生徒を引率して来るように」という教師の言い付けを伝えてきた。「暑い中、損な役だと思ったが、この伝令に行ったことが生死の分かれ目だった」

南千田町（中区）の学校に行くと教室に７、８人。廊下から「小早川君」が入って来たとき、「ものすごい光、その途端にがあーとつぶされて、一瞬気が遠くなった」。木造校舎の瓦や壁土の間から少しずつ身動きして外に出たら薄暗く、火災が起きていたという。倒壊校舎から出てきた級友と点呼を取った。「校舎から何かを取り出そうとしたら小早川君の頭だった」

四竈牧師たちは机に座っていたが、立ったままだった小早川君は即死。「彼との距離は２メートルぐらいだった」

父は、国泰寺町（中区）にあった日本キリスト教団広島教会（現・同大手町）の牧師。焼け跡の石壁に母が「吉島に行く」と炭で書いていたのを手掛かりに、父母と再会。広島女学院高等女学校（当時）４年の姉が行方不明だったが、被爆から５日後、矢賀町（東区）の友人宅に収容されていたことが分かった。

姉は９月に死去

一家は小学生の弟２人が疎開していた広島県双三郡和田村（三次市）に身を寄せた。しかし、姉は８月末から高熱が続き、45年９月４日、父の腕に抱かれて息を引き取った。

被爆時、建物撤去後の片付けなどで各学校の生徒たちが多数動員され、多くが死亡した。「伝令は小方君でも誰でもよかったはずだ。私が生き残ったことは亡くなった同期生が身代わりになったためではないか」。広島大理学部を卒業するころ、その問いに悩んだ。

「自分の後ろには多くの死者がいる。その人たちの生涯を背負って生きるには神様につながる仕事をするしかない」。卒業後、東京神学大に編入学した。

49年間、東京都内の教会で主任牧師として働いた。2004年、長野県で牧師をしていた次弟が70歳で亡くなったのを機に、一家の被爆体験を本にすることを思い立った。

資料を集めようと、父の遺品の箱を開けたとき、姉のはがきが見つかった。父母と再会する前、収容されていた友人宅から弟たちの疎開先にあてていた。差出人の姉の名前のそばに「八月七日」。お父さんやお母さん、揚ちゃんのことは分からないけど、自分が必ず迎えに行くからー。

四竈牧師は「姉は重傷だったが、親代わりになろうとしたのだろう」と話す。はがきは今年８月、中区の原爆資料館に寄贈した。

「今の社会、テレビゲームの影響か、気に入らない人を消してしまおうという考えが広がっている」。他者へのそんな認識が国と国との対立になり、兵器として行き着いた先が核兵器。「私たちは生きていることの感謝と課題の重みを強く意識し、今できるアクションをもっと起こすことが必要だ」　(2009.11.23中国新聞)

中国文化賞受賞

上田　宗冏氏（高校16回）

武家茶の普及発展に尽力

原点の上屋敷を再現

江戸時代に広島城内にあった上田家上屋敷を昨年、広島市西区の上田宗箇流和風堂に再現した。一般公開には青森から鹿児島まで全国から応募が寄せられた。「茶の湯の道に進んだ当時、ここまでたどり着けるとは思っていなかった。皆さんのおかげ」と感謝を込める。

千利休に師事した武将茶人上田宗箇が創始し、広島に根付いた武家茶道の16代家元。

原爆で祖父母、父を亡くし、母の実家の上田家へ。４歳から茶の湯に親しんだ。20歳代から跡継ぎを意識するようになるが、当時の広島は復興の真っただ中。「未曽有の惨事に見舞われたこの街で武家文化が継承できるのか」との思いが常に頭

をよぎった。

「弟子の育成とともに、広島の人たちに郷土史、郷土文化と感じてもらえる茶道でなければ」。31歳で家伝を継ぎ、原点を見つめ直すことから始めた。原爆被害を免れた古文書や古絵図をひもとき、先祖たちのお点前を研究。茶室や庭の再現にも取り組んだ。

歴史的な茶寮、書院が全国で姿を消す中、史実に伴う再現は研究者たちにも注目され、郷土史の枠を超えた価値を生んだ。

「目指すものが本物なら再現は可能」との確信のもと、テーマは精神にも及ぶ。「安土桃山の戦乱期から江戸初期を生きた宗箇の創造性、精神性をどう現代に表現できるのか」。探究心は尽きない。

(2009.11.3中国新聞)

広島修道大学長に8年ぶり就任

市川　太一氏（高校18回）

一人一人の情熱が強さ

4年制開設から50周年を迎える来年4月から、広島修道大（広島市安佐南区）のかじ取り役を担う。「広島県内の私立大の評価は高くない。全国規模の学生獲得競争に勝ち残るため、近隣の大学間連携を強化し、一体的に評価を上げるべきだ」と決意を語る。

学長に就くのは8年ぶり。18歳人口の減少による「大学全入時代」を事実上迎え、各大学には閉塞感が漂う。1996年から6年間の学長時代に、教員給与削減などの思い切った改革を進めた手腕に再び注目が集まる。

教職員による学長選でも圧倒的な支持を得たが、「トップが何とかしてくれるだろうという人頼みなら筋違い」。前回のようなリーダーシップによる改革路線とは距離を置く。修道大の隠れた強みに気付いたからだ。

広島藩の藩校を母体に発展した修道大にはオーナーがいない。「強力なリーダーを頂いて改革に突き進むより、『同僚組織』として各教職員が行動力を発揮するほうが組織風土に合う」とみる。

4年前の学長選は「やるべきことはやった」と辞退していた。今回は、旧知の教職員から「自分の大学をもっとよくしたい。辞退しないでほしい」と熱心に口説かれ、根負けした。「一人一人の情熱が、修道大が持つ強さ。自ら考え、自ら動く集団をつくりたい」と思うようになった。

中国地方の30大学・団体でつくる「教育ネットワーク中国」の代表幹事でもある。「学長として臨むことで、単位互換などの大学連携をさらに活発化させる」。西区で妻と2人暮らし。(藤村潤平)

(2009.12.2中国新聞)

五木さん作品「親鸞」を語る

渡辺　郁夫氏（高校28回）

修道中高教諭中区で講演会

五木寛之さんの作品をとりあげた修道中高教諭の渡辺郁夫さん(51)の講演「小説『親鸞』を読み解く」が2日、広島市中区の中国新聞ビルであった。

中国新聞社など主催。渡辺さんは、吉川英治作「親鸞」や津本陽さんの「弥陀の橋は　親鸞聖人伝」などを引用しつつ「迷い、苦しみながら成長する、生身の人間として描いたのが五木さんの特徴だ」と語った。

親鸞は「範宴（はんねん）」「綽空（しゃくくう）」などたびたび名前を変えているが、その事実が心境の変化を表すのに巧みに使われていたという。親鸞が30代、念仏弾圧で越後に流される場面で小説は終わる。渡辺さんは「流罪を新たな出発点として描いているのも優れた見方」と話し、続編を期待していた。

(2009.11.3中国新聞)

抗菌剤で感染予防

二川　浩樹氏（高校32回）

東広島「酒まつり」新型インフル対策

東広島市で10、11の両日ある「酒まつり」の実

行委員会や酒蔵などが、流行期に入った新型インフルエンザ対策を進めている。イベント会場のテーブルなどに、広島大が開発した抗菌剤を噴霧。マスクの無料配布も検討している。２日間で20万人以上が訪れるイベントだけに、感染予防に万全を期す。

広島大の教授提供

マスク無料配布も

抗菌剤を開発したのは、大学院医歯薬学総合研究科の二川浩樹教授（47）。消毒液が乾いた後も、成分が物質表面に化学結合する特長があり、実験では最長で半年間効果が持続したという。宮島（廿日市市）のフェリーやロープウエーなどでも、９月下旬から使われている。

酒まつり実行委は二川教授に協力を要請。20リットル分の抗菌剤を無償提供してもらった。演劇など各種のイベントがある市中央公民館や、９日に前夜祭を催す広島大サタケメモリアルホールの手すりやドアノブなどにも吹き付ける。

抗菌剤は、酒造９社にも配分。市販の消毒液との併用で、感染対策を手厚くする。客にマスクを無料配布したり、調理担当者に手袋着用を義務づけたりする酒蔵もある。

新型インフルの流行のため、全国で中止になるイベントが続出。酒まつり実行委は５月から対策の検討を続けてきた。まつりは20回目の節目。例年以上の盛り上がりが期待される。村上孝治副委員長は「できる限りの対策をした。安心して、楽しんでほしい」と呼び掛けている。

（2009.10.8中国新聞）

港まちづくりの現場を歩く－広島港－

新田　時也氏（高校34回・東海大学海洋学部専任講師）

今年10月初め、調査のため広島港を訪れた。瀬戸内海に面する港であるので波が穏やかであり、夕暮れ時には瀬戸内海に浮かぶ島々が、ほんのりと赤みを帯びていた。その景観は旅情をそそる「秋の海」、まさにそのものであった。

ご存じの方も多くおられようが、この広島港は、唱歌「港」（作詞・旗野十一郎、作曲・吉田信太）の舞台の地として、有名である。

♪空も港も　夜は晴れて　月にかずます　船のかげ　はしけのかよい　にぎやかに　よせくる波も　黄金なり♪

1896年（明治29）年に作られた唱歌「港」は、94年（明治27）年に始まる日清戦争で、清国に軍隊、軍事物資を送る役割を果たした宇品港（現広島港）の繁盛の様子をうたったものであると言われており、1975（昭和50）年、それを記念して歌碑が宇品中央公園に建てられた。

当時の宇品港は、先にも述べたように、「軍港」としての役割を果たす港であった。その宇品港を築港した人物が、「千田貞暁」（1836-1908）である。

筆者は千田の功績を調査するため、「千田廟公園」を訪れた。薩摩藩士の子として生まれ、戊辰戦争では新政府軍として戦った千田は、80（明治13）年、県令（現県知事）として広島県に赴任してきた。

着任早々、千田は「広島湾が年々太田川の流砂のために、海運の支障が著しい」（「千田翁銅像の由来について」）ことを目の当たりにし、築港の必要性を痛感した。千田は早速、翌年から築港のための調査を開始し、ついに89（明治22）年11月、宇品築港が完成した。

完成した宇品港は、大陸に軍隊、軍事物資を送るための重要な役割を果たすこととなり、日清戦争時には、師団のある広島に大本営が設置されるなど、軍都の玄関口として、大いににぎわったようである。

軍港として繁盛した宇品港は32（昭和7）年に広島港と改称され、現在では、海運物流の重要な拠点として、特定重要港湾に指定されている。その礎を築いた人物が千田であり、今でも「毎年４月23日翁の忌日には市民がここ（千田廟公園）に集まり、遺業をたたえ霊をなぐさめている」（前掲）とのことである。

「広島港の父」としての千田をたたえる市民の集まりが、みなとまちづくり活動を支えているように思われた。

ついでながら、筆者は東京オリンピックの年、宇品に生まれた。千田廟公園は、学校行事で何度も訪れた場所として、思い出深い地である。

(2009.11.13日本海事新聞)

市民に青年の“夢”を語る 広島まちづくり「未来地図」作成

緒方　直之氏(高校28回・広島ドリームデザイン委員会委員長)

未来の広島市のまちづくり構想をイラストと共に描いた冊子と地図「広島“夢”未来地図～青年の夢を広島の街に～」を作成した。

「実際にはいくらお金がかかるか、法的に問題はないかといった実現可能性にとらわれることなく、将来、何が広島に必要か、どうなったら人々は安心して楽しく生活していけるかを念頭に地図を作りました。市民の方々がまちづくりを考えるきっかけにしていただきたい」

ＪＲ広島駅前の森林化、広島西飛行場を退役ジャンボジェットの展示場とするエアポートパーク、河川沿いのデコレーション、旧市民球場跡には折りづるを飾ったサッカー専用スタジアム、市内を循環する交通網－などを提言した。09年度の広島青年会議所の基本方針「Dream On！前へ、今、胎動の時」を受けて、16人のメンバーで08年10月から作成に着手。自由に論議する中で100以上のアイデアが噴出し、最終的に12の構想に絞り込んだ。社会に閉塞感がある今だからこそ、未来の夢を語り、元気づけたいという。

「今後、この夢が実現に向けて歩き出すことを願っています」

Ａ４判30頁で1000部発行し、市内の公共施設や学校などに配布。

(2009.10.8広島経済レポート)

学園だより

第62回修道高等学校卒業式

学年主任　片　山　行　弘

３月６日(土)、6年生はついに卒業の日を迎えました。現在建築中の新しい体育館での実施を目指しておりましたが、惜しくも工期が間に合わず、ウェルシティ広島に会場を移して行われました。しかし、校外の立派なホールをお借りしての卒業式ということで、ある意味、特別な思い出深い旅立ちの日となりました。

校長の式辞では、「邂逅(かいこう)」という言葉が紹介され、人と人とが出会うことの意味について深く考えさせられるお話でした。元生徒会長の中島直矢君による答辞は、現在の厳しい社会状況を乗り越えていこうとする決意が力強く述べられた堂々たるものでした。式直後に行われた恒例の「ちょっと待った」では、壇上に上がった８名の卒業生が音頭をとり、保護者や修道への感謝の気持ちがユニークな形で表現され、和やかな笑いの中にも感動溢れる一幕でした。「蛍の光」の演奏に合わせて退場していく卒業生の表情は、みんな晴れ晴れとしており、とても大人びて見えました。学園生活を通して培われた、彼らの確かな成長を実感でき、胸が熱くなりました。来賓の方々からもお褒めのお言葉をいただき、修道生活の締めくくりに相応しいすばらしい卒業式であったと思います。

式後は、修道にバスで戻り、各クラス毎に学級行事が行われました。思い出の写真を編集したDVDを上映したり、メッセージカードを卒業証書に添えて手渡したり、それぞれの学級担任が趣向を凝らしたホームルームとなりました。なんと、クラスの生徒全員の似顔絵(驚くほど似ています)を描いてプレゼントした担任の先生もいました。

62回生が修道に残してくれた卒業記念品は、新体育館に設置される記念碑です。「見よや修道魂を」の文字が刻まれたこの石碑は、修道の新しいシンボルとして、これから体育館を訪れる多くの人々を迎えることになります。62回生の皆さん、君たちの中にはこの"修道魂"が息づいています。卒業おめでとう。そして新たな出発です。62回生に幸あれ。

同　窓　会　長　祝　辞

修道高等学校第62回卒業式に臨み、修道学園中・高同窓会を代表いたしまして、ひとことお祝いの言葉を述べさせていただきます。

皆さんご卒業おめでとうございます。

本日めでたく卒業された皆さんを、我が同窓会にお迎えできましたことは、同窓生一同心からの喜びであります。

この度の栄えある卒業は、皆さんの日々たゆまぬ努力の結晶であることはもとより、これまで慈しみ、育んでこられた保護者の皆様や校長先生をはじめ多くの教職員の方々の献身的なご指導によるものであることも忘れないでいただきたいと思います。

ご存知のように同窓会は、同じ学園生活を送った人々が世代を超えて結びつき、会員相互の親睦と母校修道の発展を目的として日々活動を続けております。

二万八千名を数える多くの同窓生は、政治、経済、文化、法曹、教育、医療等のあらゆる分野で活躍をされ、わが国はもとより広く国際社会において貢献をしておられます。

同窓会は、これらの同窓生が相集うための組織であり、その歴史は古く、来年の８月で１００周年を迎えます。今後皆さんは各界で活躍されることになると思いますが、どうか地元広島はもとより他の地域や職域の同窓生と、積極的な交流を図ってください。

「吾が道、一（いつ）以て之を貫く」　これは孔子の教えで、私の大切にしている言葉です。その教えるところは「一つの道理をもって、事

のすべて、あるいは生涯のすべてを貫くことで、一貫した道とは忠恕であります。“忠”とは誠を尽くすこと、忠実、忠誠であります。“恕”とは他人の心も自分の心の如く考えること、相手の立場になる思いやりの心の意味であります。」これから出会う数多くの同窓生はもとより、人との交流には、この言葉が教えるように、真心で接していくことが大切であると思います。やがて結ばれた相互の強い絆は、必ずや大きな支えになるものと確信をいたしております。

さて、皆さんは今日を境としてさらなる目標に向かって大いなる歩みを続けられますが，その道のりには、多くの艱難辛苦が立ちはだかるかもしれません。

かかる時にこそ、修道で培われた“修道魂”を遺憾なく発揮し、力強く乗り越えていただきたいと念じております。

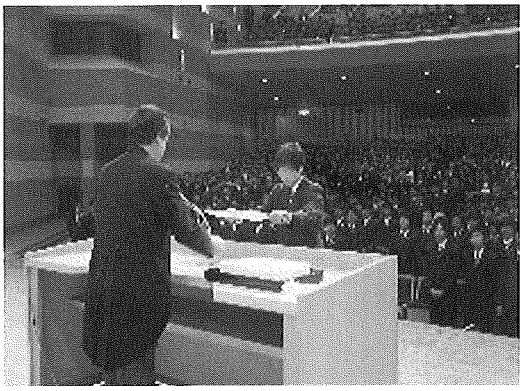
結びに、皆さんの未来が前途洋々であることを心からお祈りいたしますとともに、次代に寄与する有為な人材となられますことを切望して、私のお祝いの言葉といたします。

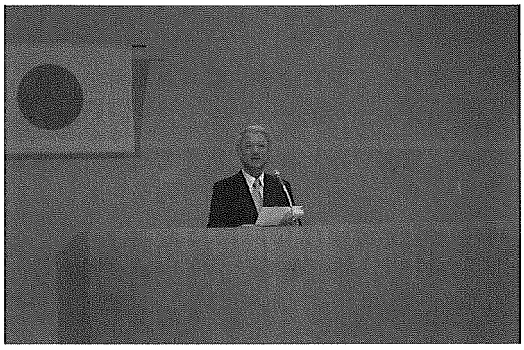
本日のご卒業、まことにおめでとうございます。

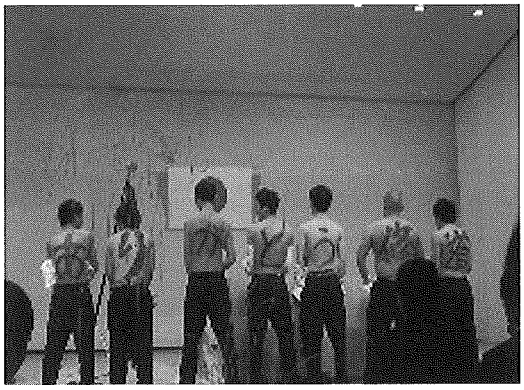
平成22年3月6日

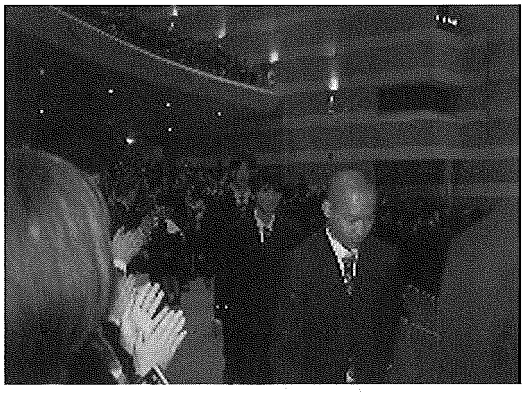
修道学園（中・高）同窓会

会長　大　田　哲　哉









学園だより

修道中学校・修道高等学校　総合体育館完成

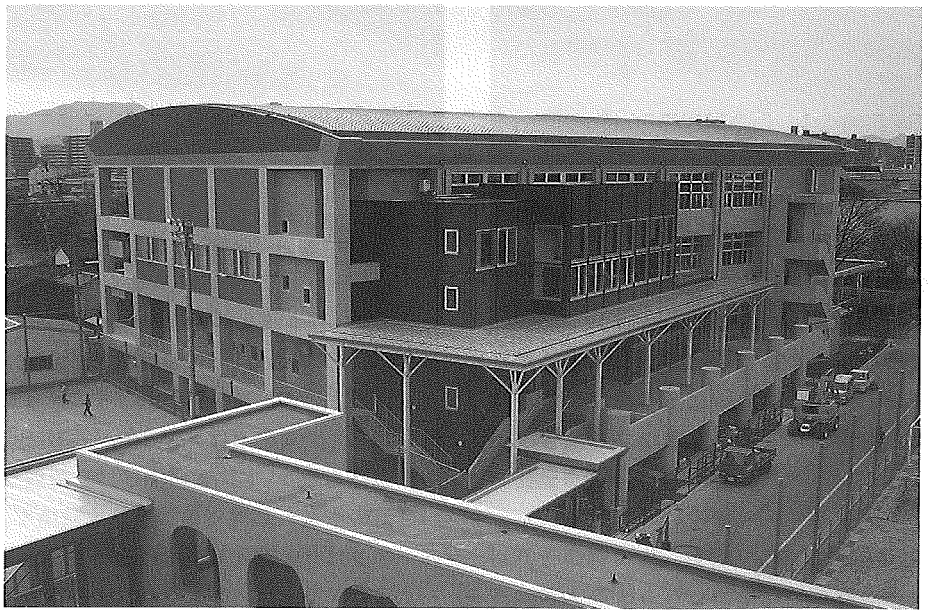
近年耐震基準が強化され、旧耐震基準で建築された諸施設の耐震強度の問題がクローズアップされてまいりました。

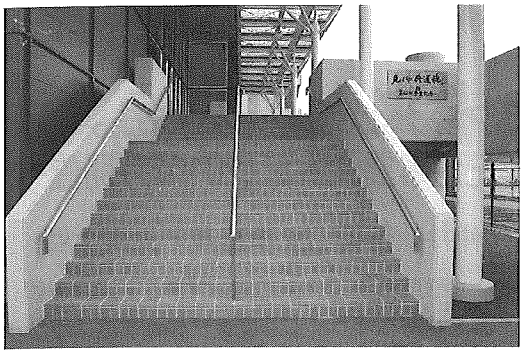
修道中学校・修道高等学校におきましても、1978年に建築し約30年が経過しておりました旧体育館について、耐震診断を実施し耐震補強工事を含めた今後について検討いたしました結果、今般、生徒の安全性を図ることを最優先として建替工事を決定し、平成21年３月１日に着工、平成22年３月19日に竣工いたしました。

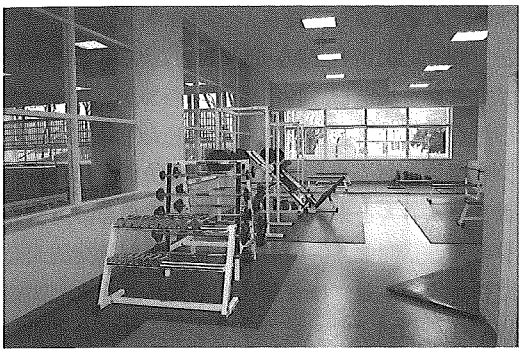
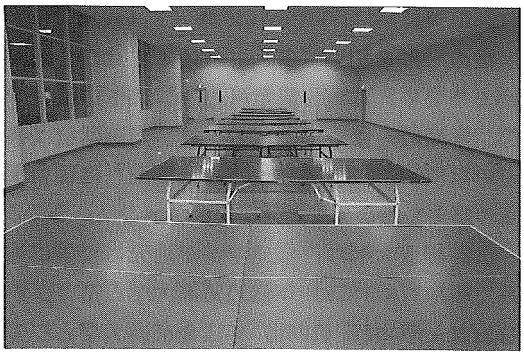
もとより限りある資金、限りある敷地、さらには限られた工期のなかでの工事ではございましたが、完成いたしました新体育館は、耐震性はもとより、機能性やデザイン性等にも最新かつ斬新的な意匠や技術を導入した設計、施工となっており、今後、体育、文化活動の拠点施設としての役割を大いに担ってくれるものと期待をしております。

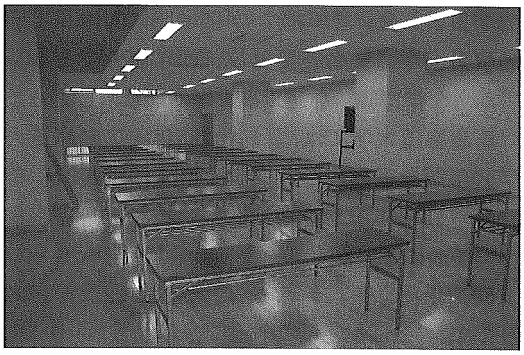
建築概要

構　　造：鉄筋コンクリート造　一部鉄骨造
階　　数：地上４階
建築面積：2,631.89㎡
延床面積：6,627.54㎡
最高高さ：22.25m
最高軒高：18.65m
1　　階：サブアリーナ
(780㎡：バスケットコート１面分の広さ)
駐輪場（約1,450台収容可能）
2　　階：ミーティングルーム
(219㎡：授業・合宿・音楽活動等に使用)
卓球場（350㎡）
トレーニングルーム（121㎡）
体育研究室
3　　階：メインアリーナ
(1,477㎡：体育・文化活動や諸行事等に使用)
ステージ（169㎡）
4　　階：ギャラリースタンド
(470人収容可能な観覧席)







APECジュニア会議国内代表に選出

２月20日(土)～24日(水)に、APEC参加国地域の青少年が参加するAPECジュニア会議が広島で開催されました。これはAPEC高級実務者会合の広島開催に合わせて、21カ国・地域の16歳から18歳までの青少年が集い、交流したり、経済・環境・平和などのテーマで意見交換するものです。開催テーマは「私たちの地球の未来～平和で豊かな社会を築くために～」です。

この参加国メンバーとして、日本から４名（うち２名が広島から）が代表で参加し、その一人に本校４年生の三宅利智君が選ばれました。２月20日～24日まで、他の参加国メンバーと行動を共にし、ワークショップなどで討論を行いました。

また、４年の二井谷勇佑君は開会式・閉会式の司会、岡田悠輝君はスタッフとして様々な業務を行いました。

連合ニュース

つなげたい。人と未来と広島を。

学園創始285年・広島修道大学50周年記念事業、本年(2010年)開催へ

広島修道大学50周年記念事業推進室　仲井　正美（元事務長・大商２回）

修道学園の揺籃は浅野吉長公が、享保10年（1725）11月４日寺田臨川に命じて、白島の稽古屋敷の一部を割いて藩士に教授をさせたことが始まりです。これを講学所と称し、その後講学館、学問所、修道館、浅野学校、修道学校、修道中学校、修道高等学校と時代の流れに従い変遷の歴史をたどってまいりました。

広島修道大学は、修道学園が地元の要請に応えて昭和27（1952）年修道短期大学（第二部）を設置、昭和35（1960）年広島商科大学として開学しました。その後、学部増設に関連して広島修道大学に校名を変更し、四年制大学となってから今年で50年を迎えることになりました。

広島修道大学では、「創始285年・広島修道大学50年記念事業」を計画し、平成19（2007）年６月「50周年記念事業推進室」を設置し着々と準備を進めています。

50周年記念事業の基本コンセプトは次のとおりです。

① 開学から半世紀の足跡をたどり、今日まで本学の発展に寄与していただいた関係者への「感謝」の意を表す。

② “地域をリードする大学”、“魅力ある大学”として大学環境の整備を行い「修道ブランド」を高める。

③ 事業の実施を通じて卒業生をはじめ後援会、地域社会、地元経済界などの関係者との絆を深める「修大ネットワーク」を構築する。

このような３つの基本コンセプトの下に「つなげたい。人と未来と広島を」というキャッチコピーと「SHUDO2010 THANKS 50ＴＨ」の50周年記念ロゴマークを決定し、各種のプレイベントを行いました。主なものを挙げてみますと、①50周年カウントダウンコンサート（８回開催）、②プレシンポジウム「人と未来と広島経験－平和と国際協力を考える」開催、③韓国小学生サッカー交流大会協賛、④折り鶴プロジェクト協賛、⑤未来HIROSHIMAトークセッション、⑥ラッピング電車（50周年記念広報）、⑦ひろしまフラワーフェスティバル「広島修道大学ひろば さつきステージ（5／3～5／5）設置、⑧記念講演会「藩校、修道、十竹先生」開催、⑨吉田拓郎歌碑建立などを行ってきました。

いよいよ今年（2010年）は、「学園創始285年・広島修道大学50年」の年になります。「広島修道大学五十年史」「目で見る修大50」（仮称）刊行のほか、11月上旬には記念式典、イベントが予定されています。具体的な計画は新年度に入って発表されると思います。

なお、「広島修道大学50年」事業に関連して、修道短期大学、広島商科大学、広島修道大学及び修道学園関係の記念品、写真、資料を探しています。卒業生の方で該当品がありましたら是非ご連絡下さい。（連絡先　082（830）1111　広島修道大学50周年記念事業推進室　仲井・楢崎）

事務局だより

故平山郁夫画伯「お別れの会」

田　中　佳　樹（事務局長）

2009年12月2日に逝去された、本校同窓生である故平山郁夫画伯「お別れの会」が2010年2月2日(火)午前11時から港区のザ・プリンスパークタワー東京で執り行われた。

当日は早朝に降った雪の中、林　正夫理事長、高木一之同窓会会長代理を始め学園、同窓会からも多くの方々が参列され、亡き平山郁夫画伯のご冥福をお祈りした。

正面に画伯の遺影。白い花々と画伯の描かれたシルクロードの昼と夜の空を描いた屏風で設えられた祭壇には、生前受章された文化勲章やフランスのレジオン・ドヌール勲章などが飾られていた。

お別れの会委員長【(財)日本美術院理事長】、副委員長【東京芸術大学学長】、前ユネスコ事務局長からの弔辞に引き続き、ご遺族・ご来賓・ご親族の皆様の献花ののち、出席者全員（報道機関の発表では各界から約2,600名）が白いカランの花を霊前にお供えした。お話では、画伯は入院中も寸暇を惜しんで、お見舞いの花々や病室の窓越しに見える風景をスケッチされていたようで、鎌倉のアトリエにも展覧会に出品する予定であった絵の下絵が残されており、絵を描くことへの情熱は亡くなる直前まで失われることはなかったようだ。

画伯は激動の少年期を修道で過ごされており、陶板画「希望の光　安芸の小冨士」の除幕式のご挨拶では、「日本の大変なときに人間形成を受け、ここをバネに画家となって、文化による平和の祈りを描き続けております。これもみんな、広島で、修道中学で一番大切なものを心に刻んでまいりました。ここを原点としてやっております。」と話されている。遺作となった被爆モニュメントにある揮毫「歴史に生きる」、「素描画原爆ドーム」とともに、作品に込められた画伯の思いを今一度思い起こし、次代に語り継いで行くことの大切さを感じている。

2月13日(土)には尾道市主催の「お別れの会」が瀬戸田ベルカントホールでも執り行われた。

謹んで平山郁夫画伯のご冥福をお祈りいたします。

事務局だより

平成22年度同窓大会開催一覧

◎広島修道大学大学院同窓大会
開催日時：2010年６月26日(土) 17：00～
会　　場：ホテルＪＡＬシティ広島
(広島市中区上幟町7-14
TEL 082-223-2580)
会　　費：6,000円
《お問い合わせ先》
広島修道大学大学院同窓会事務局（石井健二郎）
TEL 0824-22-2171

◎修道学園（中・高）同窓大会
開催日時：2010年９月４日(土) 18：30～
会　　場：リーガロイヤルホテル広島
(広島市中区基町6-78
TEL 082-502-1121)
会　　費：6,000円（同伴者4,000円）
《お問い合わせ先》
修道学園（中・高）同窓会事務局
TEL 082-241-6686

◎広島修道大学同窓大会
開催日時：2010年11月６日(土) 19：00～
会　　場：リーガロイヤルホテル広島
(広島市中区基町6-78
TEL 082-502-1121)
会　　費：6,000円（予定）
《お問い合わせ先》
広島修道大学同窓会事務局
TEL 082-830-1321

学園紛争心残りは卒業式

修道高で８月「証書」授与

修道高校（広島市中区）を1970年３月に巣立った卒業生が今年８月、学園紛争の激化によってできなかった学年全体での卒業式を母校で開く。多感で奔放だった青春時代を振り返り、間もなく迎える60代への門出にしようと意気込んでいる。

廿日市市の音楽家松本憲治さん（58）たち約10人が実行委をつくり、40年ぶりの卒業式を計画した。８月15日にホールで、恩師の模擬授業や「卒業証書」授与、当時流行したフォークソングの合唱などを企画している。

松本さんたちが高校３年生だった69は、全国各地で起きた学園紛争が修道高にも波及した。管理教育の撤廃を訴える生徒が、校舎をバリケード封鎖。高校に機動隊が出動する事態となり、全国の注目を浴びた。混乱の恐れがあった翌年３月の卒業式は、９学級約450人がそれぞれ教室で開く「分散卒業式」となった。

「高３の１年間はそれぞれの人生の起点になっている」。松本さんたちは同窓会などで再会を重ねるたび、その思いを強くした。節目の卒業40年を控えた昨年末、「60代で仕事を離れた後の人生を考えるステップにしたい」と動きだした。

かつては学校側と対立した卒業生からのホール利用の申し入れを、学校側も快諾した。田原俊典校長（53）は「高２から認められる私服着用のルールは、当時の生徒が勝ち取った。その自由と責任の重みを、教員と在校生で大切に継承したい」と話している。

訃　　報

景山　崇人氏

(旧中33回：元修道学園中高同窓会会長代理)

平成21年９月５日　ご逝去　享年85歳

氏は昭和５７年４月から平成１４年３月まで長年にわたり同窓会幹事を務められ、副会長、会長代理を歴任され、同窓会活動にご尽力いただいた。

また、昭和56年６月から６年間学園監事、昭和62年５月から６年間学園理事として学園の運営にご尽力いただいた。

片山　顕親氏

(高校６回：元修道中学校・修道高等学校教諭)

平成21年10月６日　ご逝去　享年73歳

氏は昭和33年４月１日に修道学園教諭として就任。38年にわたり数学科の教鞭をとられた。時に厳しく、時にやさしく生徒の育成・指導にご尽力いただいた。

石田　道俊氏

(元修道中学校・修道高等学校教諭)

平成21年11月５日　ご逝去　享年102歳

氏は昭和22年11月10日に修道学園教諭として就任。約18年にわたり社会科の教鞭をとられ、戦後の修道の復興にご尽力いただいた。食糧難の時代にあって食べさせることに日々奔走され、「うどん」や「芋」にまつわる先生との思い出を語る同窓生は多い。

田辺甲子生氏

(旧中33回：元修道中学校・修道高等学校教諭)

平成21年11月10日　ご逝去　享年85歳

氏は昭和40年４月１日に修道学園教諭として就任。20年にわたり数学科・技術家庭科の教鞭をとられた。丁寧で解りやすい授業をされ、生徒の育成・指導にご尽力いただいた。

平山　郁夫氏

(旧中39回)

平成21年12月２日　ご逝去　享年79歳

氏は三九一会に所属され、同窓会活動への深いご理解とご尽力をいただいた。

「素描画原爆ドーム」や陶板画「希望の光 安芸の小冨士」の原画の創作、また被爆モニュメント「歴史に生きる」の揮毫をいただいた。

佐古　一氏

(旧中24回：関東支部名誉会長)

平成22年１月22日　ご逝去　享年94歳

氏は修道学園同窓会関東支部の会長、名誉会長を長年努められ、同窓会活動にご尽力いただいた。

北川洸太郎氏

(旧中33回：元修道学園専務理事)

平成22年３月８日　ご逝去　享年85歳

氏は平成５年５月から平成11年５月まで修道学園専務理事として、学園の運営にご尽力いただいた。

修道中学校・修道高等学校の校舎建設についての先鞭を付けられた方でもあった。

心からのご冥福をお祈りいたします。

会報誌へのご寄稿、支部、同期会などのご報告につきましては、ご多忙にもかかわらずご協力いただき誠にありがとうございました。今後も会報誌への記事を募集いたしておりますので、積極的に原稿をお寄せいただきますようお願いいたします。次回の発刊は平成22年９月の予定です。